

## 第4章 あいりんの人口と居住環境の変遷

### (1) 釜ヶ崎（あいりん）とは

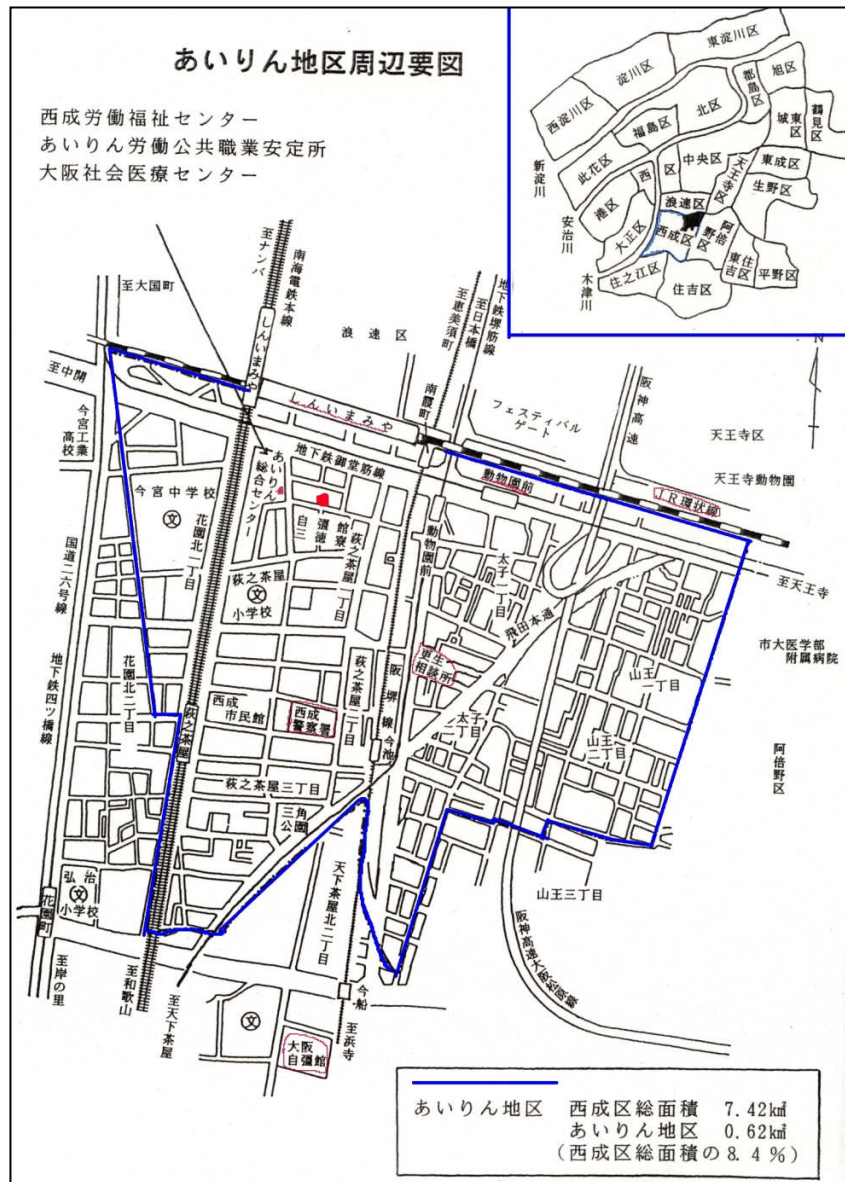
西成区太子1丁目に「大阪市立更生相談所」があります。大阪市立更生相談所条例<sup>(1)</sup>にもとづく、「あいりん住民の福祉の向上を図るため、労働者を対象とした各種の相談・保護事業と、環境改善の事業を行う機関」だそうです(平成8年版事業概要)。

事業概要には「あいりん地区周辺要図」が掲載されていますが、右の地図に見られる地域囲み線は後で書き込んだもので、掲載されている原図にはありません。

釜ヶ崎は、大阪市西成区の北東に

位置し阿倍野区、浪速区に隣接しています。1966(昭和41)年6月に大阪府・大阪府警察本部・本市による「三者協議会」が設置され、各役割分担のもとに対策をたてるとともに、「あいりん」の呼称を使用することが決められました。

警察の資料である「あいりん地区の実態」(昭和57年3月 大阪府警防犯部/西成警察署)には、『昭和36年8月1日地域内において発生した交通事故に端を発したいわゆる釜ヶ崎騒動が起り、これを契機に種々の地域対策が講ぜられ区域を阿倍野区境まで広げて、昭和41年6月から「あいりん地区」と呼称されるようになった。』と書かれてい



ます。

しかし、最近の大阪市は、「あいりん」の名称は決めたが、「あいりん地区」と定めたことはなく、用語としては、「あいりん」あるいは「あいりん地域」、「あいりん対策」を用いているとしています。

そうはいつても、「あいりん地区」が全く存在しなかったということにはなりません。大阪市会の議会記録では、1993（平成5）年まで質問者の発言や理事側答弁に「あいりん地区」が見えます。

大阪市会記録によれば、西成区選出柳本豊委員の発言に「あいりん地区と言われますけども、これはあいりん地区とは申しません。あいりん問題、あいりん対策、あるいはあいりん地域、こういうような表現をいたしておりまして、民生局におきましてもそういうような表現を以前からお願いいたしております。」とあり、平成6年頃から言葉の言い換えを主張したと考えられます。【平成10年11・12月定例会常任委員会（民生保健）-11月09日-01号】

柳本市会議員の主張により、少なくとも理事者側では「あいりん地区」を使わなくなったということがうかがわれますが、1966（昭和41）年6月当時からそうであったわけではありません。

大阪市立更生相談所の平成20年版「事業統計集」に付けられた「事業概要」には「あいりん地域」の範囲が、右表のように掲げられています。

あいりん地域	
山王	1丁目・2丁目・3丁目（一部）
萩之茶屋	1丁目・2丁目・3丁目（一部）
花園北	1丁目（一部）・2丁目（一部）
天下茶屋北	1丁目（一部）
太子	1丁目・2丁目

あいりん地域内にある町丁によっては、全体でなく、一部が含まれている所があるということのようです。

そうなったについては、地域内の町名変更の影響が考えられます。

1973年に町名変更になったことで、それまでの旧町名で構成されていた「あいりん地区」が、新町名ではすっきり表せなくなつたと考えられます。

新町名(1973年)	新町名に含まれる旧町名		
萩之茶屋1丁目	東入船町	西入船町	
萩之茶屋2丁目	甲岸町	海道町*	
萩之茶屋3丁目	東萩町	海道町*	
太子1丁目	東田町		
太子2丁目	今池町*		
山王1丁目	山王町1丁目	山王町2丁目	
山王2丁目	山王町3丁目		
花園北1丁目	東四条町1丁目	東四条町2丁目	東四条町3丁目
天下茶屋北1丁目	今池町*		

事業概要に掲載されている地域範囲では、おおよそこの範囲というのは判断できますが、統計数字を見る場合などには不便です。

とりわけ、国勢調査などのように町丁目データまで公表されているものを使う場合は、もう少し、はっきりと範囲を確定しないと利用することは困難です。

大阪市健康福祉局が作成した『2007年5月「ホームレス対策・あいりん対策一事業

分析報告』には、「あいりん地域の人口推計」が掲載されており、国勢調査を参考にしたとされています。

2005年国勢調査町丁別集計と照らし合わせると、「萩之茶屋1～3丁目、山王1・2丁目、太子1・2丁目、花園北1丁目、天下茶屋北1丁目」の合計であることがわかります。

この地図上の範囲は、先に掲げた地図の枠内範囲内とほぼ合致しています。

「あいりん地区」という場合は、ここに掲げられている範囲を指すことにします。

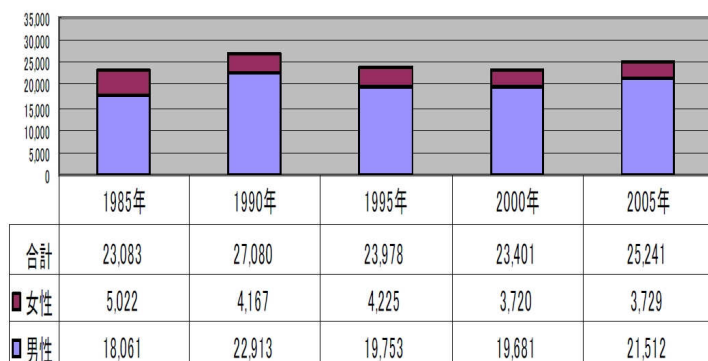
その線引きに従えば、面積は0.62平方キロで、西成区全体の約8.4%を占めています。

2005(平成17)年国勢調査によれば、西成区人口は132,767人で、地区人口は区人口の16.2%を占めています。

面積の占める割合より人口の占める割合の方が倍高く、人口の密集度が高いことがわかります。

人口における男女比は、女1に対し、男5.8で、地区を除く西成区の男女比が、女1に対し、男1.1と比べると、男性割合の高さが目立ちます。

あいりん地域の人口推計 (単位:人) (国勢調査参考)



2005(平成17)年国勢調査			
	総計	男性	女性
地区人口合計	25,241	21,512	3,729
萩之茶屋1	6,710	6,208	502
萩之茶屋2	5,598	5,401	197
萩之茶屋3	2,177	1,864	313
山王1	2,017	1,134	883
山王2	1,819	1,124	695
太子1	3,798	3,396	402
太子2	637	513	124
花園北1	1,920	1,483	437
天下茶屋北1	565	389	176
町丁別計	25,241	21,512	3,729



▲山王地区の木造アパート



萩之茶屋・簡易宿泊所



萩之茶屋地区。簡宿転用アパートが多い通り



萩之茶屋・屋台が多い通り



三味線の形をした猫塚のある神社は、路地の奥にある

## (2) 国勢調査に見る変化

国勢調査の結果により、地区人口と西成区の推移（男女別・合計）をグラフにすると右のようになります<sup>(1)</sup>。

### ○人口推移

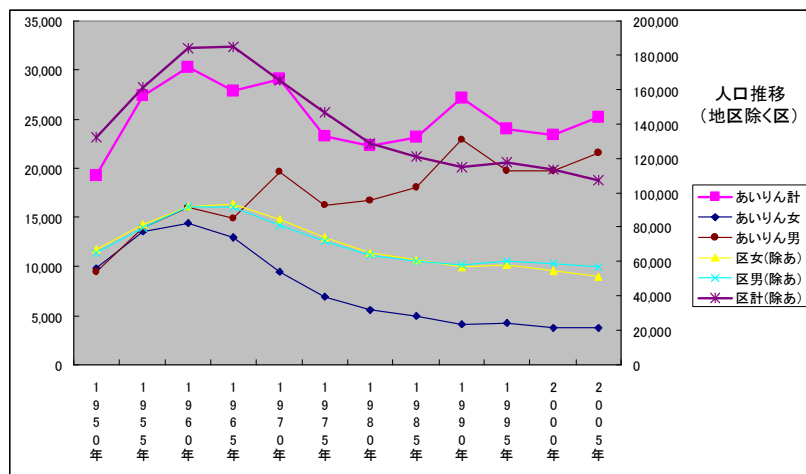
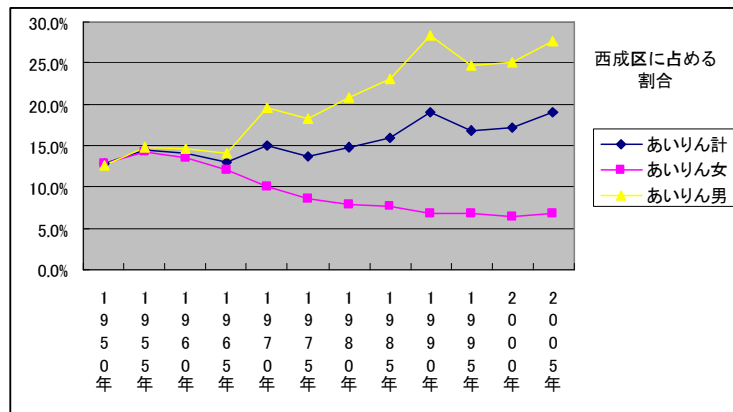
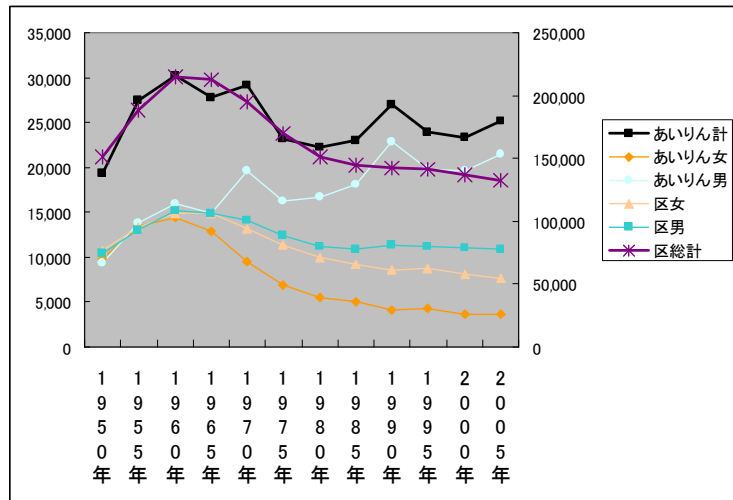
区人口、地区人口共に 1960 年までは増加していますが、区人口は 1965 年以降減少に転じているにもかかわらず、地区人口は増減を繰り返しています。

女性人口は、区・地区とも 1965 年以降減少していますが、減少率は地区の方がはるかに大きくなっています。男性人口は、地区人口については増減幅が大きく、200 年～2005 年

では増加傾向となっています。区男性人口は 1965 年以降減少傾向なのですが、1990 年以降やや持ち直します。

人口推移の下のグラフは、区に占める地区の割合を示したのですが、地区男性人口が区男性人口に占める割合は、1990 年が高くなっており、区男性人口への影響が大きくなっていることを示しています。2005 年には区男性人口の 27.6%が地区に住んでいるという結果となっています。

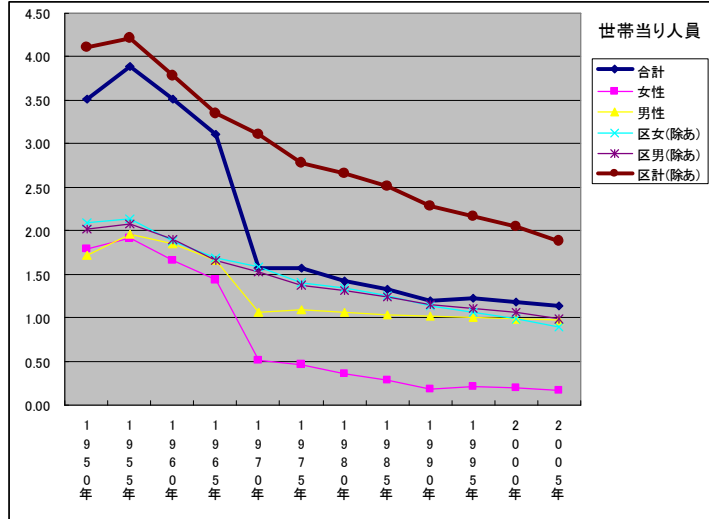
西成区の計からあいりん地区



の数字を引いたものとあいりん地区計で作図したのが前頁下段のグラフです。あいりん地区の直接の影響を除いた区の男女の差は、上段のグラフよりは小さく見えます。

### ○世帯人員推移

世帯当たり人員は、あいりん地区、あいりん地区を除く西成区共に 1955 年が最大であり、以降減少を続けます。しかし、減少幅の様相が違い、地区では 1970 年に大きく落ち込み、極端な単身化が進んだことを示しています。特に、女性の減少が著しく、1 世帯当たり一人もいない状況となっています。あいりん地区を

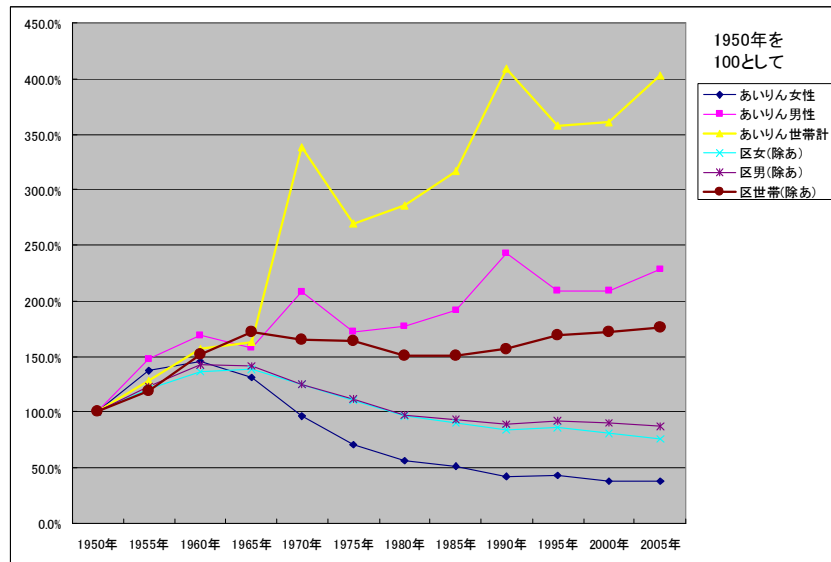


除く区では、核家族化の進行はありながら、世帯当たり男女比はほぼ半々の状態で推移しています。

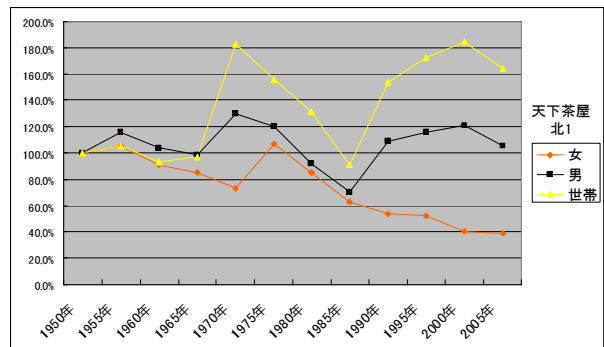
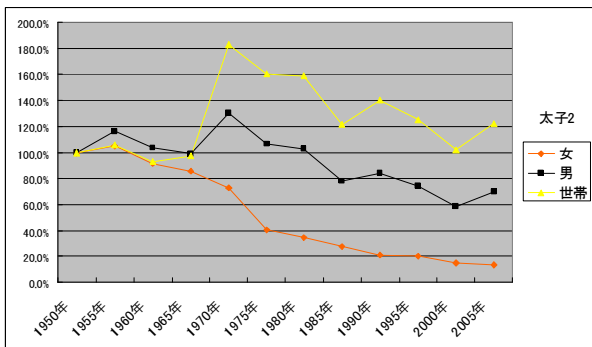
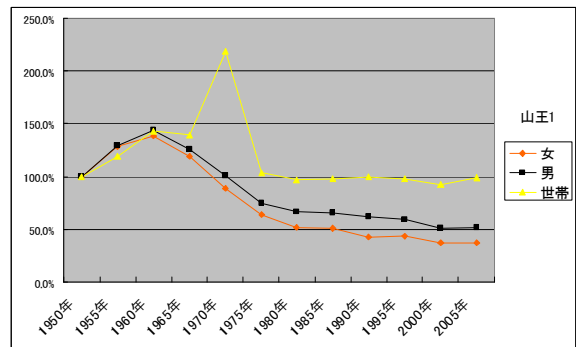
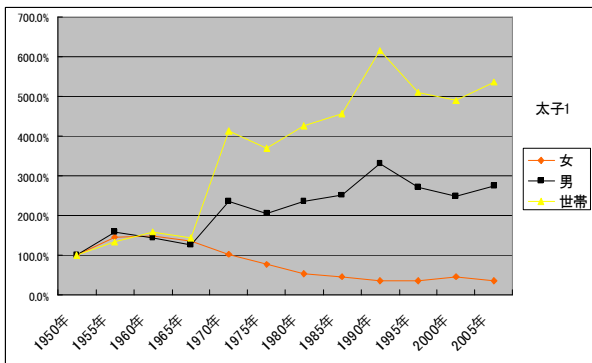
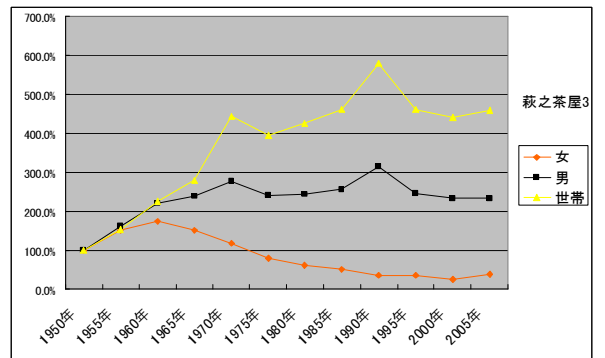
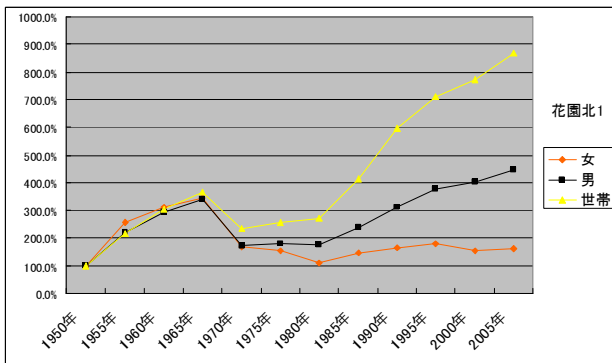
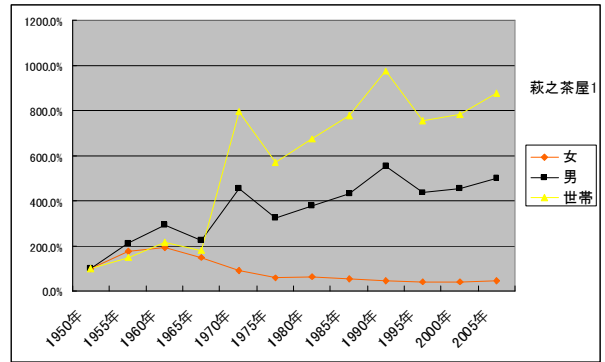
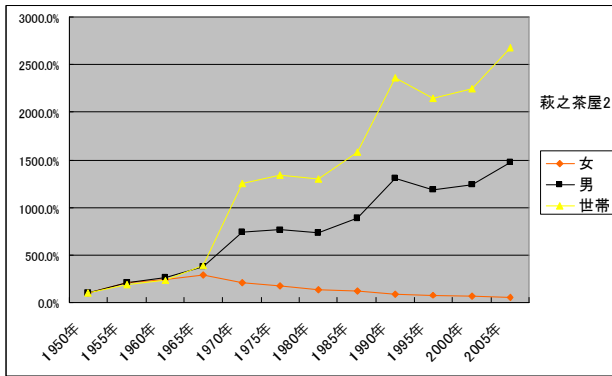
あいりん地区を除く区でも、2005 年には 1 世帯当たり 2 人を割り込んでいます。あいりん地区と共に、男女別々に世帯当たり人員を見ると 1 人いない（それぞれ 0.9 人）ということになっており、男性あるいは女性の一人世帯が増えていることを示しています。

あいりん地区は、ほぼ男性の単身世帯だけといってもいい状態です。

1950 年を 100 として、人口、世帯数の増減変化のグラフを作成してみました。



西成区（あいりん地区除く）は、男女人口共に 1980 年以降 1950 年の数字を下回っています。一貫して 1950 年の数字を上回っているのは、世帯数、あいりん男の数字であることがわかります。



一口にあいりん地区といっても、町丁別に男・女・世帯の数字の推移を見るといくつかのパターンと膨張の大きさに違いがあることがわかります。萩之茶屋2丁目の変化が最も大きく、男性人口についていえば、1995年の落ち込みを除いて拡大し続けています。萩之茶屋2丁目は、地区全体の乱高下を規定する特色を示しています。



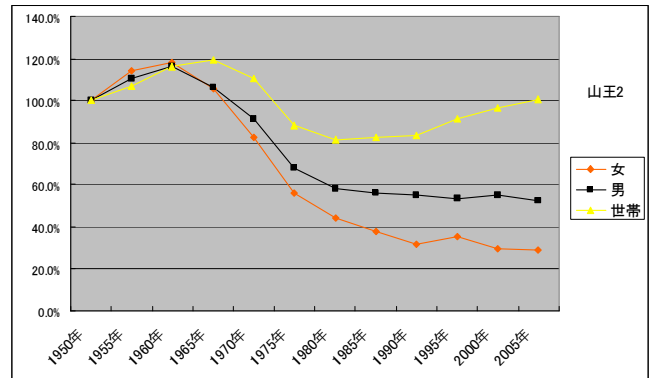
1942年 白線は戦災復興土地画整理事業の萩之茶屋工区界  
『甦えるわが街—戦災復興土地画整理事業(西成地区)』  
大阪市建設局,1990年所収



1948年  
米軍撮影空中写真「R500-70」より

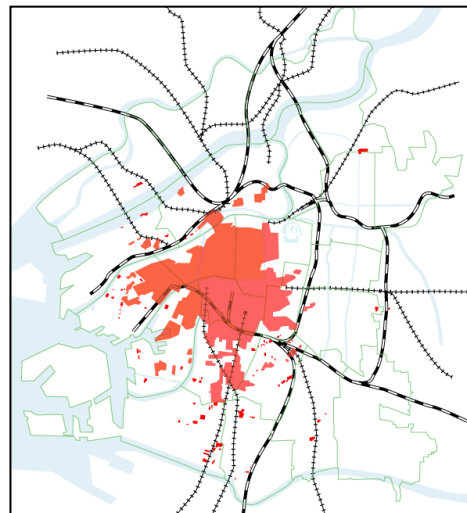


1953年  
国際新聞社  
『航空写真地図大観「大阪編」』1953年より(市図蔵)



あいりん地区人員推移

	1950年	1970年	1990年	2005年
萩之茶屋1	2,339	6,629	7,375	6,710
萩之茶屋2	712	3,444	5,099	5,598
萩之茶屋3	1,631	3,210	2,825	2,177
山王1	4,606	4,322	2,388	2,017
山王2	4,560	3,954	1,944	1,819
太子1	2,382	4,116	4,516	3,798
太子2	1,643	1,615	806	637
花園北1	602	1,026	1,483	1,920
天下茶屋北1	821	808	644	565



○大阪空襲と釜ヶ崎=簡宿の変遷

1945年3月31日第1回大阪空襲

<http://www.geocities.jp/jouhoku21/heiwa/o-kuusyuu1.html>

地区内各町の現在に至る変化に影響を与えた要因の一つに、1945年3月31日第1回大阪空襲があげられます。

左写真と上の国勢調査数字を見ると、焼け残った地域の人口の停滞・縮小傾向は明らかです。闇市として一時期栄えた

今池周辺（太子2丁目・天下茶屋北1）は、人口が減少し、人口の増が遅かった萩之茶屋2丁目（とりわけ旧甲岸）は、簡宿そして現在の転用マンションによって人口の増加を実現しています。

現在営業している簡宿（平成19年度末）と転業マンション（平成20年8月現在）の施設数地域内分布は、萩之茶屋1・2丁目、太子1丁目で84.2%を占めています。

これらの地域は、空襲により焼けた地域です。

「簡易宿所調（昭和36

所在地	分類			所在地別占める割合			転業率
	簡宿	転業	総計	簡宿	転業	総計	
萩之茶屋1	35	21	56	31.5%	29.2%	30.6%	37.5%
萩之茶屋2	31	24	55	27.9%	33.3%	30.1%	43.6%
萩之茶屋3	6	9	15	5.4%	12.5%	8.2%	60.0%
太子1	31	12	43	27.9%	16.7%	23.5%	27.9%
太子2	1	2	3	0.9%	2.8%	1.6%	66.7%
山王1	1		1	0.9%	0.0%	0.5%	0.0%
山王2	1	1	2	0.9%	1.4%	1.1%	50.0%
山王3		1	1	0.0%	1.4%	0.5%	100.0%
花園北1		1	1	0.0%	1.4%	0.5%	100.0%
花園北2	1		1	0.9%	0.0%	0.5%	0.0%
天下茶屋東1	1		1	0.9%	0.0%	0.5%	0.0%
天下茶屋北1	1		1	0.9%	0.0%	0.5%	0.0%
天下茶屋北2	2	1	3	1.8%	1.4%	1.6%	33.3%
総計	111	72	183	100.0%	100.0%	100.0%	39.3%

年8月現在)」は「釜ヶ崎の実態 大阪府警察本部防犯部」に掲載されているものですが、宿泊人数は「現在釜ヶ崎地区には次表のとおり、180軒（許可130軒、無許可50軒）の「ドヤ」があり、これに居住ないしは一時滞する者の数はおおむね12,000～13,000名ぐらいと推定される。」とされています。

（参考資料：釜ヶ崎の実態 大阪府警察本部防犯部 昭和36年9月－参照してください）<sup>(2)</sup>

1960年国勢調査では地区人口30,306人（男15,943人、女14,363人）でした。女性の利用者は5分の一と推定されていますから10,000人（12,500÷5×4）がドヤ利用男性と計算されます。この推定値は、国勢調査男性の62.7%にあたります。バラック・一般世帯の男性人員が把握されれば、国勢調査の把握率もある程度計算できるのですが、手持ちの資料ではできません。

「s46」「s47」は、「あいりん地区の実態」各年版に掲載されていた表です。

簡易宿泊所の収容能力が1万人も増加していることが示されています。

簡易宿所調（36.8現在）

許可の有無 町名別	有		計
	有	無	
東田	36	4	40
山王1～3	20	1	21
東入船	34	21	55
西入船	13	3	16
海道	6	8	14
甲岸	12	4	16
今池	3	1	4
曳舟	3	2	5
東四条	2	2	4
東萩	1	4	5
小計	130	50	180
水崎地区			
霞町2			
水崎	3	5	8
馬淵		40	40
小計	3	45	48
合計	133	95	228

s46

区分	有許可		無許可		合計	
	数	収容能力	数	収容能力	数	収容能力
個室(小間)	145	14,929	61	6,539	206	21,468
ベッド式	1	230	*	*	1	230
個室・ベッド併用	8	941	1	50	9	991
大部屋・個室併用	4	207	*	*	4	207
計	158	16,307	62	6,589	220	22,896

s47

区分	有許可		無許可		合計	
	数	収容能力	数	収容能力	数	収容能力
個室(小間)	148	18,157	56	3,188	204	21,345
ベッド式	1	230			1	230
個室・ベッド併用	3	436	3	276	6	712
大部屋・個室併用	3	197			3	197
計	155	19,020	59	3,464	214	22,484



宿泊施設軒数。収容能力

		簡易宿所	共同住宅	日払い アパート	一般 アパート	旅館	バラック	マンション	合計
昭和46年	軒数	220	2	46	286		25		579
	収容能力	22,896	330	2,852	10,582				36,660
昭和47年	軒数	214	3	56	278		25		576
	収容能力	22,484	330	4,200	20,850				47,864

簡易宿泊所以外の宿泊施設を含めた数字は、上記表ですが、収容能力が急増加している様子が伺えます。ただし、集計範囲が本稿で指すあいりん地区よりも広いと思われる、幾らか差し引いて見る必要があります。

1970年の地区人口29,124人(男19,665人、女9,464人)でした。仮に、西萩町(花園北2に相当)人口1,606人(男732人、女874人)を足すと、人口30,730人(男20,397人)となります。

18,300人(簡易宿泊所収容能力の8割)÷(地区男性人口19,665人+西萩町男732人)=52.9%。

これにより、地区男性の52.9%は簡易宿泊所の利用者と推定することができると思われま

す。ちなみに宿泊施設収容能力に占める簡宿の割合は62.5%。その8割(利用率)は、50%です。この計算の難点は、持ち家が考慮されていないことですが、この地域では、とりあえず無視しても大きな影響はない数字だと考える

別表第1 その1 地区内における簡易宿所等調査 昭和56年12月末現在

業態別	町名別	地区内における簡易宿所等調査										合計	上段:最大 収容人員 下段:55年 との対比	
		花園北 1丁目	花園北 2丁目	萩之茶 1丁目	萩之茶 2丁目	萩之茶 3丁目	太子 1丁目	太子 2丁目	山王 1丁目	山王 2丁目	山王 3丁目			1天下 1丁目
簡易宿所	(2)	2	(60)	(39)	(19)	(39)	(4)	(3)	(2)		1	(168)	17,674	
アパート	日払	(3)	(2)	(5)	(8)							(15)	2,310	
	月払	(3)	(4)		(1)			(1)				(9)	3,942	
旅館		9	10	29	36	21	46	16	58	38	1	6	270	
計	(8)	18	10	95	85	53	100	25	81	55	2	8	532	
構造	旅館						6	3	12	8		1	30	
	簡易宿所	木造	1		27	18	7	22	2	5	3	1	1	87
		鉄筋	(1)		(21)	(16)	(8)	(15)	(2)	(2)				(65)
	アパート	平屋			34	24	13	24	2	3	1			102
		木造2.3階	日払											0
			月払											0
		鉄筋	日払	(5)		(3)	(1)							(9)
	月払				1	3	8				1			20
	計	(6)		(22)	(19)	(10)	(16)	(2)	(3)	(1)			(19)	
			18	10	95	85	53	100	25	81	55	2	8	532

注:上段( )は、毎月20日調査の対象件数を示す。下段( )内は、5階以上の高層建築を示す。

宿泊施設軒数。収容能力

		簡易宿所	共同住宅	日払い アパート	一般 アパート	旅館	バラック	マンション	合計
昭和57年	軒数	189		43	270	32			534
	収容能力	17,674		2,310	3,942	537			24,463
昭和58年	軒数	181		45	270	30			526
	収容能力	15,089		2,466	3,942	537			22,034
昭和59年	軒数	180		42	246	27		15	510
	収容能力	14,508		2,798	6,278	477		388	24,449
昭和60年	軒数	177		42	244	27		15	505
	収容能力	14,540		2,825	6,233	477		808	24,883

簡易宿泊所、利用状況調べ

昭和50年	軒数	196	参考:日雇11,059人 その他1,602人、 女子供757人。計13,418	利用率 66.9%
	収容能力	20,046		
昭和55年	軒数	188	参考:日雇11,815人 その他1,509人、 女子供480人。計13,804	利用率 74.8%
	収容能力	18,431		
昭和58年	軒数	183	参考:日雇11,254人 その他1,060人、 女子供387人。計12,701	利用率 83.4%
	収容能力	15,213		

ことにします。

全頁「別表第1 その1」は、「あいりん地区の実態 ☆昭和56年の防犯活動概況を中心として 大阪府警察本部防犯部 / 西成警察署 昭和57年3月」に掲載されていたものです。

その下の表は、「あいりん地区の実態—あいりん白書」各年版から作成。

	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
	1960年	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
合計	30,306	27,818	29,124	23,217	22,233	23,083	27,080	23,978	23,401	25,241
女性	14,363	12,906	9,464	6,956	5,554	5,022	4,167	4,225	3,720	3,729
男性	15,943	14,912	19,665	16,261	16,679	18,061	22,913	19,753	19,681	21,512
世帯計	8,623	8,948	18,608	14,824	15,731	17,434	22,504	19,648	19,864	22,130
軒数	180		220	196	168					111
収容能力	12,500		22,896	20,046	17,674					
軒数				196	188					
平均利用				13,418	13,804					
日払い			46		43					
			2,852		2,310					
世帯数				6,055	5,674		5,249	5,729	6,272	11,650
世帯人員				12,018			9,315	9,049	14,061	
1世帯当				2.12			1.63	1.44	1.21	
世帯数				8,769	10,057		17,255	13,919	13,592	10,480
世帯人員					10,218			14,663	14,352	11,180
1世帯当					1.02			1.05	1.06	1.07
一般世帯%				40.8%	36.1%		23.3%	29.2%	31.6%	52.6%
その他世帯%				59.2%	63.9%		76.7%	70.8%	68.4%	47.4%

前掲資料を整理し、国勢調査の世帯分類を付け加えたのが上の表です。

もっとも資料数字の多い1980（昭和55）年で国勢調査と実態との差を推測してみることにします。普通世帯は5,674世帯で、1世帯当たり人員が2.12ですから、ほぼ男女同数と見なしても大きな間違いではないと思われます。

よって、普通世帯人員の約半数6,000人を男性とします（女性は6,018人）。地区男性合計16,679人から、一般世帯の推定男性数6,000人を引くと10,679人となります。

その他世帯人員10,218人全てを男性としても461人多い数字ですが、ほぼ妥当な計算と見なしておきます。

1980年12月某日の簡宿の利用者は13,804人とされています。ごく僅か女性、こどもも含まれていますが、そして、調査地域がここで取り扱うあいりん地区よりやや広いということもありますが、とりあえず、地区内男性の実数に近いとすると、国勢調査把握から推定されたその他世帯男性人員より3,500人は多いこととなります。

このことから、1980年国勢調査把握は、男性人員において3,500人は過小ではなからうかという推測が成り立ちます。

各国勢調査において、男性人員は2割増した数字が実態に近い、乱暴に拡大して言えば、そういうこともいえます。

ただ近年はそれが当てはまらないのではないかという傾向を示しています。

#### ○「その他世帯」の減少と「一般世帯」の増加

あいりん地区の世帯分類では、一貫して、一般世帯よりその他世帯の方が多かったと思われませんが、1995年、2000年では、人員でもその他世帯の方が多くなっています。

しかし、2005年にいたって、世帯数、世帯人員とも一般世帯の占める割合がその他世帯を上回っています。この傾向は、2005年以降も強まっているものと考えられます。このことは、国勢調査の把握率の向上に結びつくものであると考えら、男性人員の実数を計算するために国勢調査把握男性人員にかかる割増率が、1980年のように2割でいいかどうかは、現在の手持ち資料では判断できません。

一般世帯の建て方別分類によれば、地区内の持ち家に住む世帯割合は低く（1990年で全世帯の5.1%）民営の借家、あるいは簡易宿泊所に住む世帯が多いことを示しています。

一般世帯		全世帯に占める割合
住宅に住む一般世帯	5,249	23.3%
主世帯	5,193	23.1%
持ち家	1,154	5.1%
公営・公団・公社の借家	250	1.1%
民営の借家	3,686	16.4%
給与住宅	103	0.5%
間借り	56	0.2%
住宅以外に住む一般世帯	0	

2000年と2005年を比較すると、共同住宅に住む世帯が4,852世帯から10,357世帯へと急増していることがわかります。

	1995年	2000年	2005年
総数(世帯)	5,729	6,272	11,650
一戸建	605	611	634
長屋建	947	771	648
共同住宅	4,149	4,852	10,357
1・2階建	1,339	1,290	1,148
3～5階建	1,246	1,149	2,551
6階建以上	1,564	1,727	5,841
11階建以上		686	817
その他	28	38	11
総数(世帯)	100.0%	100.0%	100.0%
一戸建	10.6%	9.7%	5.4%
長屋建	16.5%	12.3%	5.6%
共同住宅	72.4%	77.4%	88.9%
1・2階建	23.4%	20.6%	9.9%
3～5階建	21.7%	18.3%	21.9%
6階建以上	27.3%	27.5%	50.1%
11階建以上	0.0%	10.9%	7.0%
その他	0.5%	0.6%	0.1%

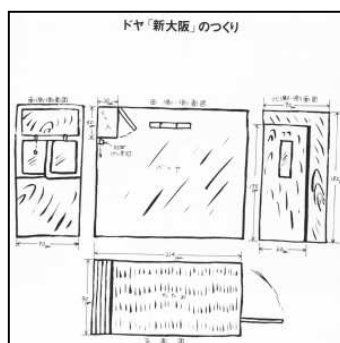
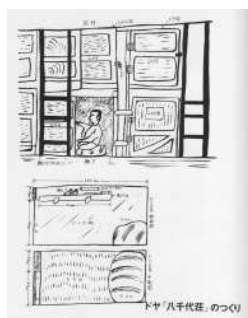
共同住宅の階層別内訳では、2000年から11階建て以上が追加されていますし、6階建て以上に住む世帯は2000年の2,413世帯から、2005年の6,658世帯へと、4,245世帯も増えています。

あいりん地区において、あたかもマンション建設ブームがあったかの如き数字ですが、64頁に示した現在営業中の簡宿・転業マンションの表でも明らかなように、簡宿から転業し、共同住宅へと変わったことから、その建物内の居住者がその他世帯でなく、一般世帯と把握されることとなったにすぎません。

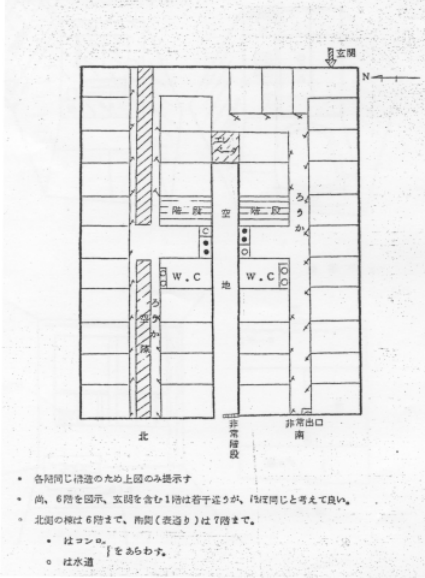
### ○人口の過密化をもたらした簡宿構造変化

焼け跡から人口密集の地へとあいりん地区がなり得たのは、狭い面積に人を収容するドヤ・簡易宿所の役割が大きいといえます。

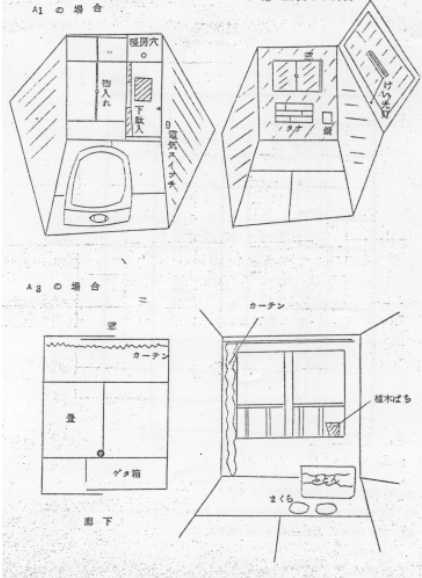
建物は高層化し、多少の改善は見られますが、三畳一間が基本であることは変わりません。



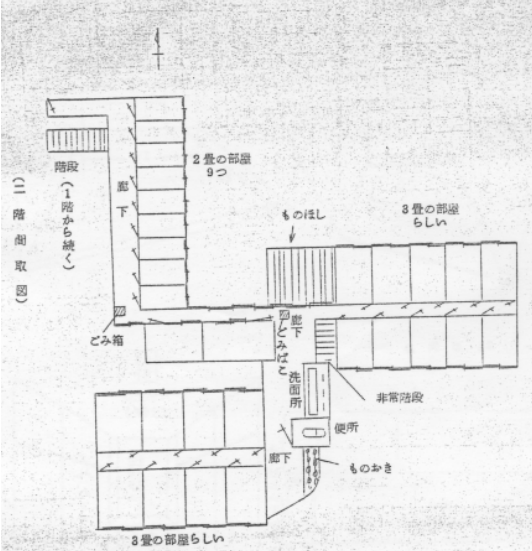
Aタイプの間取りの1例



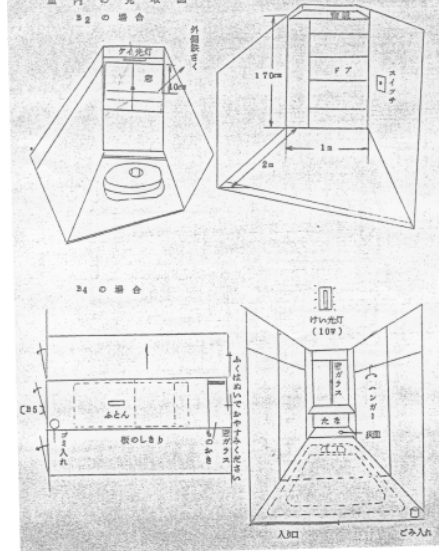
室内の見取図 3階室代(500円)



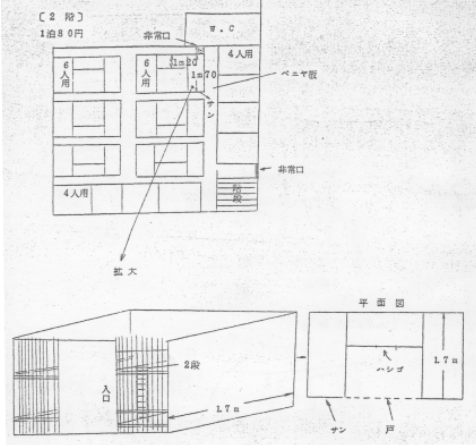
Bタイプの間取りの1例



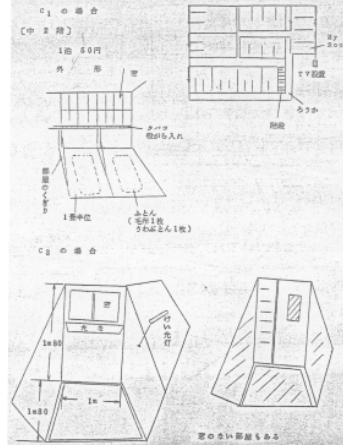
室内の見取図 B2の場合



Cタイプの間取りの1例

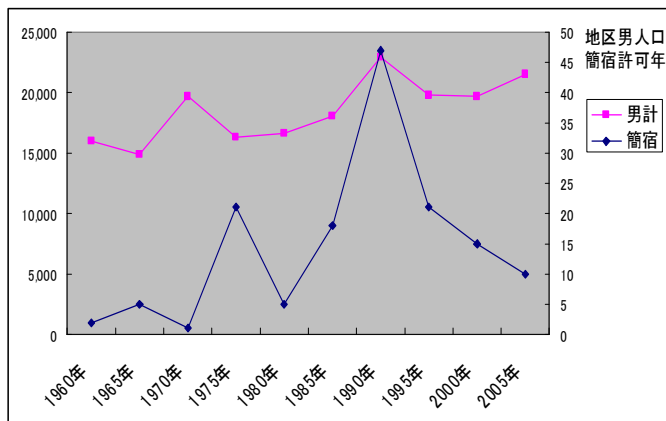


室内の見取図



所在地		簡宿	転業	廃業	総計
萩之茶屋1	把握全数	35	22	3	60
	部屋数把握施設	29	22	2	53
	総部屋数	3,207	2,415	519	6,141
	平均部屋数	110.6	109.8	259.5	115.9
萩之茶屋2	把握全数	30	24	4	58
	部屋数把握施設	20	24	3	47
	総部屋数	1,815	2,447	221	4,483
	平均部屋数	90.8	102.0	73.7	95.4
萩之茶屋3	把握全数	6	9	2	17
	部屋数把握施設	6	9		15
	総部屋数	546	554		1,100
	平均部屋数	91	61.6		73.3
太子1	把握全数	31	12	3	46
	部屋数把握施設	25	12		37
	総部屋数	2,028	904		2,932
	平均部屋数	81.1	75.3		79.2
太子2	把握全数	1	3	1	5
	部屋数把握施設	1	2	1	4
	総部屋数	52	278	66	396
	平均部屋数	52	139	66	99
山王1	把握全数	1		1	2
	部屋数把握施設	1			1
	総部屋数	30			30
	平均部屋数	30			30
山王2	把握全数	1	1		2
	部屋数把握施設	1	1		2
	総部屋数	7	49		56
	平均部屋数	7	49		28
山王3	把握全数		1		1
	部屋数把握施設		1		1
	総部屋数		37		37
	平均部屋数		37		37
花園北1	把握全数		1		1
	部屋数把握施設		1		1
	総部屋数		130		130
	平均部屋数		130		130
花園北2	把握全数	1			1
	部屋数把握施設	1			1
	総部屋数	45			45
	平均部屋数	45			45
天下茶屋東1	把握全数	1			1
	部屋数把握施設	1			1
	総部屋数	10			10
	平均部屋数	10			10
天下茶屋北1	把握全数	1			1
	部屋数把握施設	1			1
	総部屋数	210			210
	平均部屋数	210			210
天下茶屋北2	全数	2	1	1	4
	部屋数把握施設	2	1		3
	総部屋数	81	147		228
	平均部屋数	40.5	147		76
総計	全数	110	74	15	199
	部屋数把握施設	88	73	6	167
	総部屋数	8,031	6,961	806	15,798
	平均部屋数	91.3	95.4	134.3	94.6

許可年代	簡宿	転業	廃業	総計	
1955～60	1		1	2	1.4%
1961～65	3		2	5	3.4%
1966～69		1		1	0.7%
1970～74	15	1	5	21	14.5%
1975～79	5			5	3.4%
1980～84	16	1	1	18	12.4%
1985～89	33	12	2	47	32.4%
1990～94	18	2	1	21	14.5%
1995～99	9	4	2	15	10.3%
2000～05	10			10	6.9%
総計	110	21	14	145	100.0%
不明		53	1	54	



現在営業許可を受けている簡易宿泊所（110軒）とアパート・マンションへと転業した元簡宿（74軒）、そして最近5年間に廃業した簡宿（15軒）、合計199軒について、屋号・住所等を把握していますが、その中で、部屋数の分かっているものは167軒、許可年代が判っているのは145軒です。

それによると、簡宿・転業の部屋数合計は14,991部屋です。これに不明分と転業ではなく建替え分を見込みで足すと、約

18,000部屋になると思われます。

営業許可の軒数の山は、1970～74年と1985～89年に見られます。それ以前の山は、記録が残っていないので確認することができません。1965年から74年にかけて、簡宿の近代化・建替えがあったと考えられます。

関西都市社会学研究会の「あいりん地区簡易宿所調査」報告書（1969年）でも、「前時代的な木賃宿的大部屋形式の宿がだんだんと姿を消し、一収容人員別の変化では、36

年当時 24 軒しかなかった 100 人以上のマンモス宿が 41 年には 49 軒、43 年には 69 軒へと増加している。」と書かれています。<sup>(3)</sup>

1970 年 3 月の「大阪市立今池生活館・愛隣寮退居世帯追跡調査」報告書の「愛隣地区の今」の項には、「最近は万国博覧会建設ブームの好景気の余波を受けて、労務者の懐も年々豊かになり、これを吸収しようとはかる老朽木賃宿が「××ホテル」などと、現代的な名称と体裁で競合的な勢いで改築をはじめ、街の表通りだけを見ると、いかにも愛隣地区全体が新しい労務者の街へ急速に脱皮しようとしているかのような錯覚にとられる。」と記しています。

当時の地区内各町の様子についても、以下のように書き留めています。

- 東萩・海道—多人数世帯用の老朽木造簡易宿泊所が密集している。
- 東入船・西入船—単身労務者用の中層簡易宿泊所が多い。
- 山王・今池—東部は非戦災地区でアパート借間が多い。
- 東田—木造のドヤを改造した、単身労務者用高層大衆ホテルが櫛比。
- バラック建ての古い家屋が目立つ。一部不法占拠の家屋もある。

1985～89 年の山は、関空工事（1987 年埋め立て工事開始、1992 年躯体工事開始、1994 年開港）による 70 年万博準備工事期並の活況を当て込んだでの改装・建替えがあったものと考えられます。

1986 年 5 月 25 日読売新聞夕刊（大阪版）に、「愛隣地区“高級化”、宿泊所改築ブーム、新空港あてこむ」の見出しがついた記事があります。

『労働者の町、大阪市西成区のあいりん地区の簡易宿泊所が高級化し、地区全体が様変わりをはじめている。今秋にも本格着工する関西新空港を当て込んで、業者が次々と鉄筋、高層化に乗り出したため、今年すでに一軒がオープンし、九件が改装中。

“あいりん白書”によると、現在地区内にある宿泊所は 177 軒。内鉄筋は 110 軒（62%）で、57 年の 99 軒に比べ 11 軒増えた。

一方、50 年以後ずっと 1 万 7 千人前後だった地区内の労働者人口は、西成署の調べによると昨年 12 月、1 万 8 千人を超えた。』

ちなみに、国勢調査では、1975 年男 16,261 人 1980 年男 16,679 人 1985 年 18,061 人でした。16,000 人の 2 割り増しは 19,200 人、そこから一般世帯の男性推定 6,000 人を引くと 13,200 人、西成署推定の地区労働者人口 17,000 人との差は 3,800 人。多分、西成署推定の地区労働者人口には、アパート住まいの、つまり一般世帯に含まれている日雇い労働者も考慮に入れているでしょうから、一般世帯の男性推定 6,000 人の内どのくらいを日雇い労働者と見積もるかによって差は変動します。

1991 年 8 月 13 日朝日新聞（大阪版）は、「あいりん白書 30 年特集号」をもとに、「地区内の労働者はいま、推定約 2 万 1 千人。87 年下半年頃頃から好況が続き、毎年千人ずつ増えている。かつては木造だった簡易宿泊所は、大型プロジェクトの推進で日雇い労働者が流入することを見込み、86 年ごろから近代的なシティーホテル風のビルへの立

て替えが進んでいる。中にはサウナ、衛星放送受信設備付きも出てきた。広さは3畳で、料金は千～2千円が多くなっている。」と変化を紹介しています。

○単身化を促進した行政施策

あいりん地区は、これまで見てきたように、単身男性の多く住む町ですが、女性やこ

		昭和38.3月	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年
児童相談件数	養護	105	82	109	294	202	120	85	118	106	123	108
	保健					1	5	13				
	触法	73	187	122	91	56	25	44	26	21	18	28
	教護					18	7	10	21	17	14	8
	精薄					5	5	6	3	11	5	3
	不自由児	8	6	0	8	0						
	長欠不就学					5	10	17	14		3	6
	その他	3	12	14	53	36	67	57	64	2	18	4
	家庭環境相談					0				129	16	58
	引き取り					16						
	調査依頼	5	23	6	24	5	62	59	84			
	措置解除	31	71	60	76	29						
計	225	381	311	546	373	301	291	330	286	197	215	
婦人相談件数	入寮	46	62	21	27	19	15	20	17	15	18	30
	就職	361	259	197	209	117	94	65	79	81		130
	子ども連れ					69	57	54	31	47	102	
	医療	25	198	150	108	50	69	34	31	53		143
	その他	79				67	61	65	49	63	152	
	資金貸し付け	179	72	16	16	22	9	10	4			
	児童	97	200	160	141	135	97	90	75	98	82	65
	生活	27	88	59	46	60	32	20	33	41	89	95
	住宅	160	43	38	16	20	16	17	11	35	18	26
	帰郷	4	12	52	48	39	28	23	29	34	19	49
	結婚	0	3	2	6	3		3	8	3		
	家庭相談										63	62
	その他	123	147	62	88	67	85	99	101	143	67	66
	計	1,101	1,084	757	705	668	563	500	468	613	610	666
来訪者										566	666	

どもが皆無であったわけではありません。

上の表は、大阪市立更生相談所の前身といえる大阪市立愛隣会館が受けた児童・婦人相談の件数を一覧にしたものです。

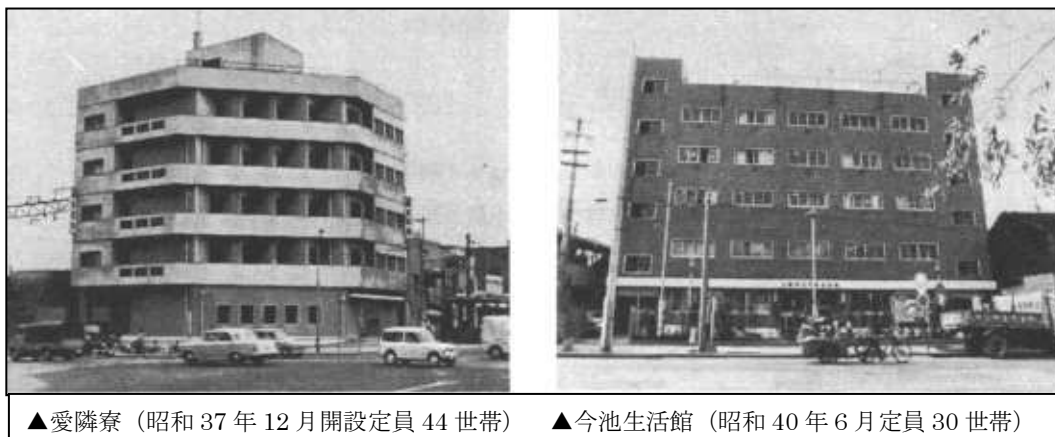
1963年から1972年にかけて、女性や児童を対象とした相談窓口があり、相談実績があったことが判ります。

「1962年2月には、地区内のドヤ住まい小人世帯を対象として1年6ヶ月の期限内で收容し、更生指導の上、公営住宅等の地区外の住宅への転出を図る目的で、大阪市立愛隣寮が開設され、続いて1965年6月、今度は愛隣寮の收容内容を一步すすめて、多子世

退居先状況		愛隣寮		
事項	市営住宅	府営住宅	アパート等	計
年度別				
37.12～38.3				
38	78	26	43	147
39				
40				
41				
42	11	19	5	35
43	8	16	4	28
44	15	2	5	22
45	12	11	7	30
46	10	6	4	20

退居先状況		今池生活館		
事項	市営住宅	府営住宅	アパート等	計
年度別				
40	2			2
41	27		1	28
42	6	10	1	17
43	20	14	1	35
44	7	5	4	16
45	11	8	4	23
46	9	10	1	20

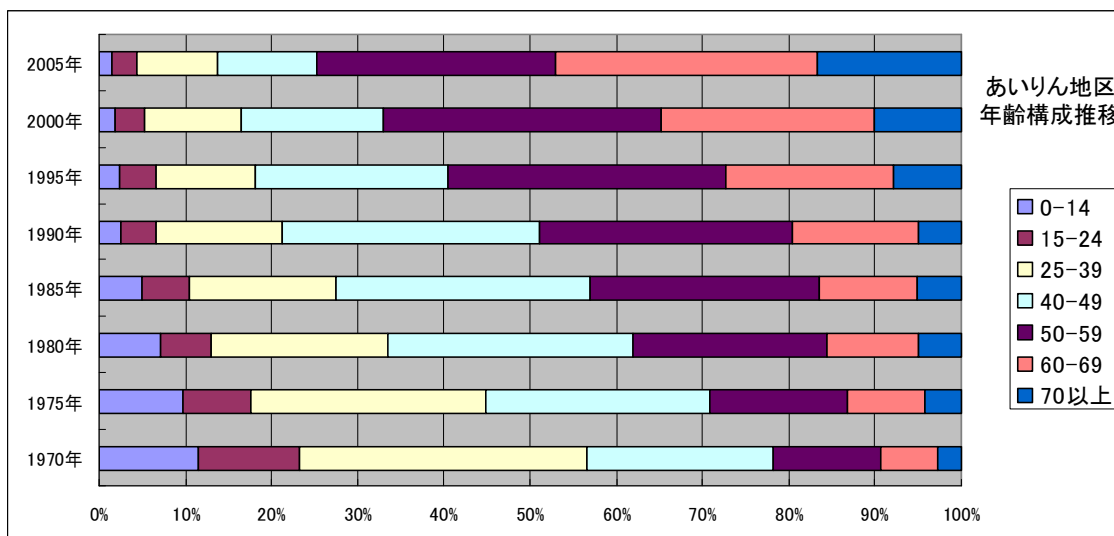
帯を対象とした同種施設、大阪市立今宮生活館が開館し、本格的なスラム・クリアランスを目指すまでの暫定的実務がスタートした」「1969年12月末までに今池生活館は94世帯、愛隣寮は230世帯の累積退居世帯数を数えている。」と、前掲「退居世帯追跡調査」報告書に書かれているように、大阪市のスラム・クリアランスが、地区内に家族持ち世帯も住める環境を整えるのではなく、単身男性の街への純化であったことは明らかです。



### ○年齢構成の変化

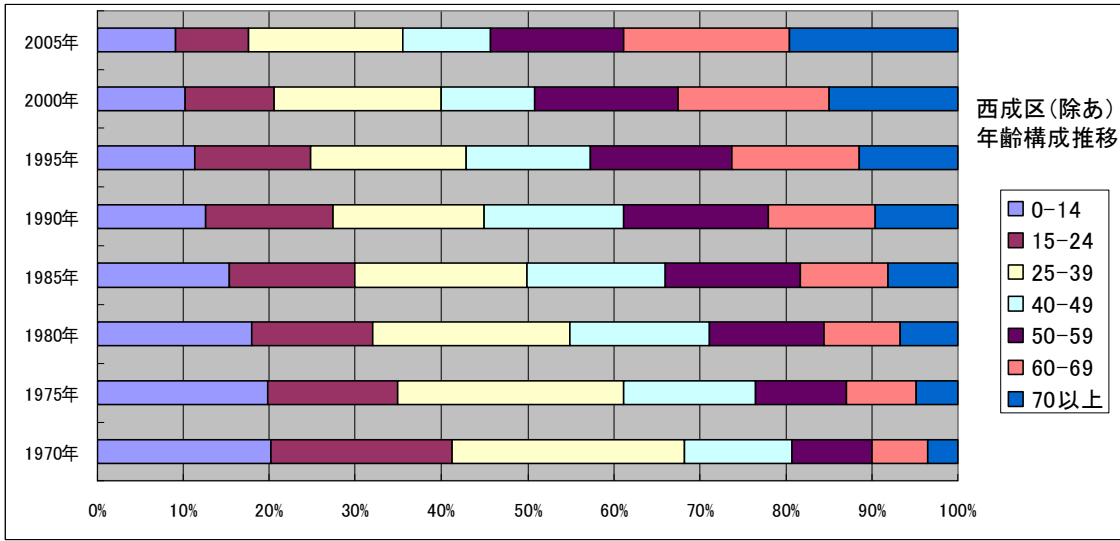
1970年の年齢構成を見ると、あいりん地区ではあいりん地区を除く西成区よりも25-49歳の占める割合が大きく、その代わり24歳以下の占める割合が小さくなっていることが判ります。その後、共に50歳以上の占める割合が大きくなっている傾向は同じですが、あいりん地区の方が極端に大きくなっています。

20歳以上を対象として平均年齢を計算すると、あいりん地区では1990年に49.9歳とほぼ50歳になっていますが、あいりん地区を除く西成区では2000年で51.1歳にな





っています。

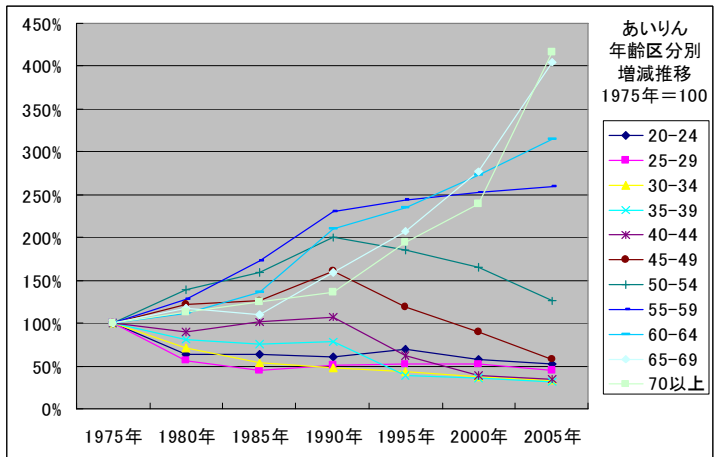


平均年齢(20歳以上・年齢階級中位×人員の総和÷人員)

	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	90-75年	05-90年
西成区(あ除)	42.7	45.3	46.8	48.0	48.8	51.0	53.3	5.4	5.3
あいらん地区	44.9歳	47.6歳	48.7歳	49.9歳	52.1歳	54.0歳	56.9歳	5.0歳	7.1歳
萩之茶屋1	43.9	46.8	48.1	49.8	52.8	54.3	57.2	5.8	7.5
萩之茶屋2	43.9	47.1	48.4	49.4	51.8	55.6	58.4	5.6	9.0
萩之茶屋3	45.7	47.9	50.0	51.4	54.7	57.4	60.4	5.7	8.9
太子1	43.9	47.1	47.9	49.1	52.2	53.5	56.7	5.3	7.6
太子2	44.6	47.7	49.1	49.7	52.9	54.8	63.0	5.2	13.3
山王1	46.9	49.7	49.9	52.3	54.0	53.5	53.2	5.4	0.9
山王2	47.0	48.9	51.3	52.3	50.9	52.6	55.7	5.3	3.5
天下茶屋北1	46.9	49.0	50.4	51.0	51.2	52.5	54.7	4.1	3.7
花園北1	43.4	46.5	44.8	44.5	46.0	47.9	52.0	1.1	7.4

参考: 1979(昭和54)年1月1日福利厚生金受給者 平均年齢 44.7歳  
 1981(昭和56)年1月1日福利厚生金受給者 平均年齢 46.1歳  
 1995(平成7年)3月末有効白手帳所持者 平均年齢 53.3歳

あいらん地区を除く西成区の平均年齢の上昇は、1975年から1990年の15年間で5.4歳、1990年から2005年の15年間で5.3歳、30年間で10.7歳上昇していますが、あいらん地区では1990年から2005年の15年間の平均年齢の上昇が7.5歳と大きく、30年間では12.1歳となっています。あいらん地区を除く西成区よりも上昇幅が大きく、90年以降の高齢化が著しいことを示しています。



1975年を100として年齢区分別に増減の推移を見ると、1990年以降の65歳以上の

増加が大きいことが見て取れます。

特に 2000 年から 2005 年にかけて 70 歳以上の増加が著しく、その間の 5 年に 65-69 歳の大きな流入があったことをうかがわせます。これはあいりん地区、あいりんを除く西成区の双方にいえることです

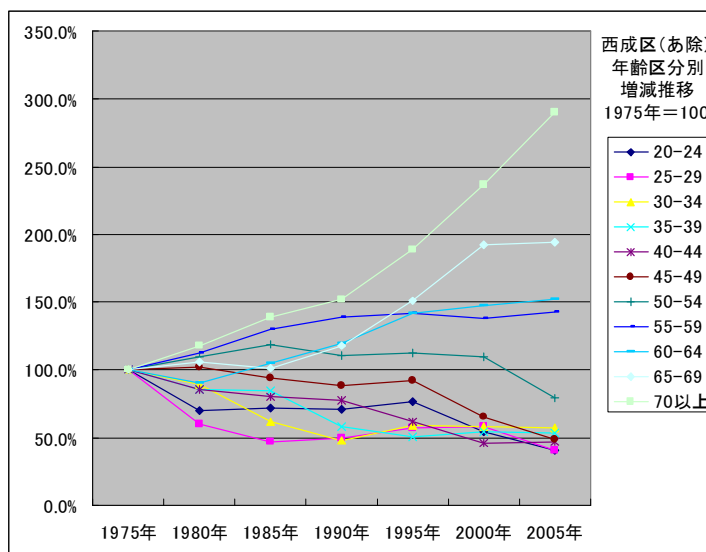
55-59 歳は、双方とも 1975 年を下回っていま

せんが、あいりん地区においては、1980 年から 1990 年にかけて、急増と言っている現象が見られます。

あいりん地区においては、35-39 歳から 50-54 歳の区分で、1990 年を山とする共通の現象が見られます。

あいりんを除く西成区では、2005 年に 50-54 歳が 1975 年を下回るに至り、1975 年を上回っているのは 50-54 歳以上の年齢区分となっています。

あいりんを除く西成区では、1990 年以降 25-29 歳と 30-34 歳に若干の回復傾向をしますが、25-29 歳は 2005 年に再び下降しています。



### ○年齢構成の変化を「世代」で考えると

さて、人というものは 1 年に 1 歳だけ歳を加えることになっています。飛び級はありません。です

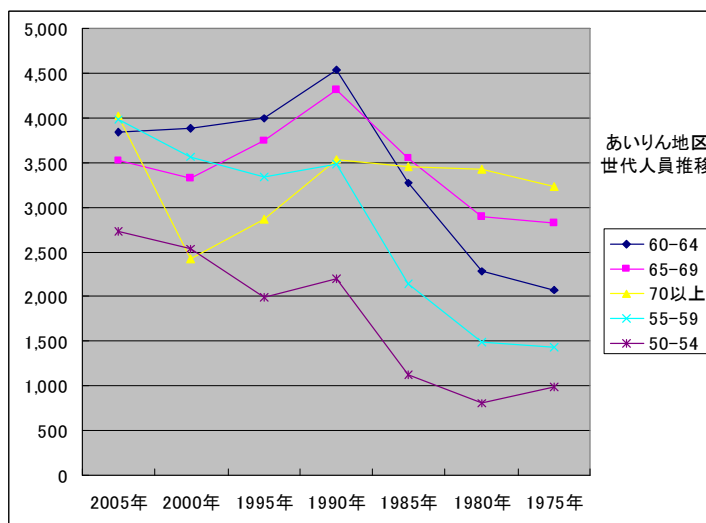
2005年	2000年	1995年	1990年	1985年	1980年	1975年
50-54	45-49	40-44	35-39	30-34	25-29	20-24
55-59	50-54	45-49	40-44	35-39	30-34	25-29
60-64	55-59	50-54	45-49	40-44	35-39	30-34
65-69	60-64	55-59	50-54	45-49	40-44	35-39
70以上	65-69	60-64	55-59	50-54	45-49	40-44

から、2005 年に 50-54 歳のグループにいた人は、その 5 年前の 2000 年には 45-49 歳のグループに含まれていたに違いありません。その 5 年前の 1995 年には、40-44 歳のグループであったはずで

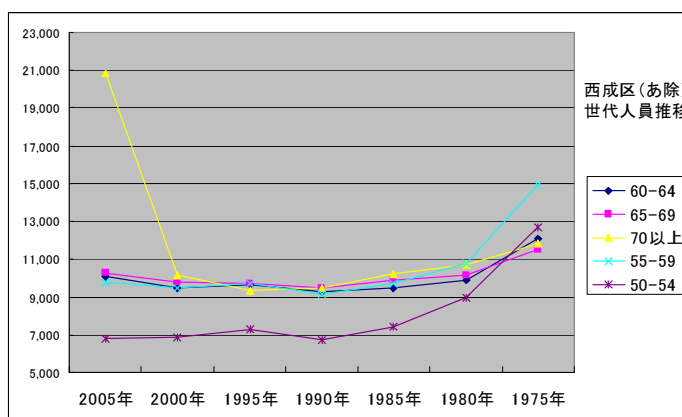
ある地域で、転入・転出が全くなければ、2000 年の 45-49 歳のグループの人数と 2005 年の 50-54 歳のグループの人数は同じはずで

ある地域を除く西成区を見ると、2005 年に 50-69 歳であった人々は、30 年前には 20-39 歳でした。その世代は、1975 年から 1980 年にかけて西成区外に転出していま

す。とりわけ、2005年に50-54歳であるグループ（1975年には20-24歳）と55-59歳であるグループ（1975年には25-29歳）の落ち込みは大きなものがあります。1975年以降この世代が働ける場所が西成区には一貫してなかったことを示しているように思えます。



2000年から2005年にかけての70歳以上の急増は、年齢に飛び級はないのですから（2000年65-69歳は10,132人）、2000年から2005年の5年間に65歳以上人口の他地域から最小に見積もって9,000人近くの入流があったようにみえますが、どうやらこれは、70歳以上が5歳刻



みでなく小計数字になっていることから生じた見かけ上のことと考えられます。

1990年以降は、停滞的であったと言えます。

あいりん地区の様相はあいりん地区を除く西成区とは大きく異なり、移動の激しさを示しています。

グラフから10歳刻みでグループ化できることが見て取れます。1990年の山以降の減少が少なく95年以降増加に転じている2005年50歳代のグループ（90年当時35-44歳）と、90年以降大きく減少し、90年水準まで回復しなかった60歳代のグループ（90年当時45-55歳）、そして、90年以降大きく減少し、2000年を底に急反転した70歳以上グループです。

70歳グループは、40-44歳（あるいはそれ以下-80歳以上も含まれるので）であいりん地区に登場し、1990年（55-59歳）まで、ほぼ停滞的に地区に留まり、その後、60-65歳の間、地区外に退出します（1,125人）。しかし、2005年には70歳以上として、地区に戻ってきます（1,608人）。2000年から2005年にかけて急増のように見えますが、この世代の地区内最大値から言えば、483人の増加にすぎないともいえます。

あいりん地区を除く西成区とあいりん地区の世代人員推移を比較すると、あいりん地

区の人員に移動が激しいことがうかがわれます。

### ○地区内外の移動量

先に紹介した（66 頁）、あいりん地区人口の推移の表を改めて見ると、1975 年から 1985 年にかけて地区人口は、23,217 人→22,233 人→23,083 人と推移しており、そう大きな変動はなかったかのように見えますが、世代人員推移のグラフを見ると、世代により地区外に移動した下降やあらたに加わった上昇が見られ、変動が見られます。

1980 年国勢調査集計で移動状況を見ると（右表）、出生を含め前回更生調査（1975 年）までにあいりん地区にすんでいた人は 52% で。残り 48% の半数は 1 年未満の居住者で占められています。

総数	出生時から	昭和50年 9月以前	昭和50年 10月～54 年9月	昭和54年 10月以降
	地元	長期	中期	短期
100.0%	8.3%	43.7%	24.3%	23.7%

数字で確認すると、1 年未満が 5,267 人であることが判ります。（人員の合計が 4 人先に紹介した人員推移より少ないのですが、これは、国勢調査の集計結果表で総数と内数が一致しない地区があるためです。総数では合っているが、内数だけで総数を出すと合わない。

	地元	長期	移動	昭和50年
萩之茶屋1	137	1,715	2,868	4,720
萩之茶屋2	104	1,292	2,024	3,420
萩之茶屋3	139	1,044	1,389	2,572
山王1	448	1,612	1,129	3,189
山王2	437	1,292	1,089	2,818
太子1	188	1,448	1,772	3,408
太子2	128	449	572	1,149
花園北1	100	426	489	1,015
天下茶屋北1	163	428	335	926
人員計	1,844	9,706	11,667	23,217

もはや訂正する手段がないと思われるので、4 人誤差のまま使用します。）

1975 年国勢調査の数字からすれば、11,667 人が移動していることとなります。2 回の国勢調査での移動量は、984 人減少という単純比較では想像できないほどの大人数 22,346 人と確認されます。

	地元	長期	中期	短期	昭和55年
萩之茶屋1	137	1,715	1,592	1,924	5,368
萩之茶屋2	104	1,292	886	880	3,162
萩之茶屋3	139	1,044	656	624	2,463
山王1	448	1,612	452	180	2,692
山王2	437	1,292	352	231	2,312
太子1	188	1,448	921	1,005	3,562
太子2	128	449	275	219	1,071
花園北1	100	426	186	164	876
天下茶屋北1	163	428	92	40	723
人員計	1,844	9,706	5,412	5,267	22,229

これを地域内外の移動関係であるとするれば、地区外移動 11,667 人、地区内への新規移動 10,679 人、その差が 988 人であるともいえます（4 人の差は前述）。地区人口の半数が 5 年間で入れ替わっていることとなります。

実際はどうなのでしょう。

昭和 50 年 10 月から 54 年 9 月までに、あいりん地区の現在居住地に移った人の異動元を見ると、大阪府外からの移動は少なく、大阪市内での移動が多いことが判ります。

昭和50年10月以降の異動元では、さらに大阪市内での移動が多いことが判ります。

町別に見れば、山王で大阪府外からの移動が多く、萩之茶屋1丁目、太子1丁目等簡宿の多いところでやや大阪市内での移動が多いように読み取れます。

このことから、移動はあいりん地区内、簡宿から簡宿への移動を意味しており、地区外との流出入を意味するものではなく、見かけの移動量ほど住民の入れ替わりはないとも考えることができます。

しかし、他の要素を考え合わせるとどうでしょうか。

男女で言えば、女性は、地区外への移動だけですが、男性は地区内外の移動があり、それらの増減を差し引きして、全体としては984人の増となっています。移動量は、2,588人と計算されます。居住開始時期から算出した移動量(22,346人)よりはるかに小さい数字であり、移動の多くが地区内移動であったことを裏付けるように思えます(右上表参照)。

年齢を45歳以上未満で比較すると、移動量は6,078人と計算されます。これも、居住開始時期から算出した移動量と比べて極めて小さいといえます。40-44歳から45-49歳への年齢区分間移動を考慮に入れると、もっと移動量は小さくなることも考えられます。

「移動はあいりん地区内、簡宿から簡宿への移動を意味しており、地区外との流出入を意味するものではなく、見かけの移動量ほど住民の入れ替わりはない」という説は、支持されるように思われます。

だがしかし、念には念を入れて検討してみることにしましょう。

各年齢区分において、移動が全くないとすれば、50年0-14歳2,249人は、55年の0-14歳+15-19歳と同じになるはずですが、55年の方が8人多く、この年齢区分において、他地区

昭和50年10月～ 54年9月	自市区町 村内	県内他市 区町村	他県	国外
萩之茶屋1丁目	1,149	256	183	0
萩之茶屋2丁目	660	121	105	0
萩之茶屋3丁目	414	138	103	0
太子1丁目	694	105	121	0
太子2丁目	189	46	39	1
山王1丁目	261	123	63	2
山王2丁目	194	109	49	0
花園北1丁目	118	44	23	0
天下茶屋北1丁目	58	28	6	0
あいりん計	3,737	970	692	3
	69.2%	18.0%	12.8%	0.1%

昭和54年10月以降	自市区町 村内	県内他市 区町村	他県	国外
萩之茶屋1丁目	1,584	178	159	0
萩之茶屋2丁目	673	84	121	2
萩之茶屋3丁目	471	77	74	1
太子1丁目	777	120	108	0
太子2丁目	170	20	28	0
山王1丁目	106	49	22	3
山王2丁目	159	43	29	0
花園北1丁目	130	13	21	0
天下茶屋北1丁目	31	2	7	0
あいりん計	4,101	586	569	6
	77.9%	11.1%	10.8%	0.1%

	男	女	計
昭和50年	16,261	6,956	23,217
移動	384	1,402	1,786
増加	802	0	802
増減	418	-1,402	984
昭和55年	16,679	5,554	22,233
	45歳未満	45歳以上	計
昭和50年	13,654	9,563	23,217
移動	3,336	195	3,531
増加	42	2,505	2,547
増減	-3,294	2,310	-984
昭和55年	10,360	11,873	22,233

年齢区分単純加齢移動での差

50年	55年	50年	55年	差分
0-14			1,592	
0-14	15-19	2,249	665	8
15-19	20-24	839	633	-206
20-24	25-29	984	808	-176
25-29	30-34	1,438	1,488	50
30-34	35-39	2,082	2,281	199
35-39	40-44	2,828	2,893	65
40-44	45-49	3,234	3,420	186
45-49	50-54	2,809	3,013	204
50-54	55-59	2,156	1,963	-193
55-59	60-64	1,539	1,357	-182
60-64	65-69	1,221	1,026	-195
65-69	70以上	871	1,094	-744
70以上		967		
計		23,217	22,233	-984

からの移動があったか、新生児があったことを示していると考えられます。

50年15-19歳(839人)は、55年20-24歳ですが、206人他地区へ移動して633人となっています。

以下同じように計算すると、年齢区分を上昇することなく他地区へ転出したもの1,696人、途中で転入してきたもの712人となります。

一方、50年と55年を同年齢区分で比較すると、単純加齢移動の表とは様相の異なった結果が見られます。この増減のなかには、単純加齢移動の差分が含まれていないので、移動量が隠されていることとなります。

そこで、差分を反映する表を作成します。

50年と55年の20-24歳を比較すると、351人減となっています。年齢区分単純持ち上がりでの計算では、206人の減でしたから、それ以上の減少があったこととなります。 $351-206=145$ 人が、20-24歳区分における国勢調査間での地区外移動と見なすことができるでしょう。移動量の合計は、351人です。

以下同じような計算をすると、移動量の総計は8,876人となります。これは、地区外への移動、地区外からの移動の合計です。居住開始時期から算出した移動量(22,346人)の約4割に当たります。6割は地域内移動であったと推察されます。

ちなみに50年で算出された移動(11,617人)の内、地域外移動は42.2%、残り約57.8%が地域内移動となります。55年で算出された増加(10,679人)の内、地域外からの移動は37%、残り63%が地域内の移動となります。(これは最小限の移動見込みと言えます。期間内の同数の出入りは計算・推測ができないからです。)

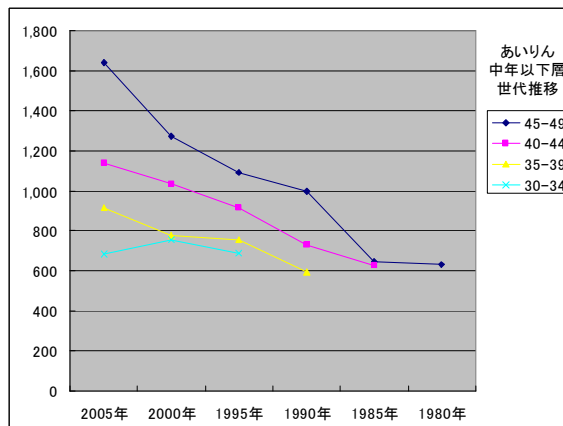
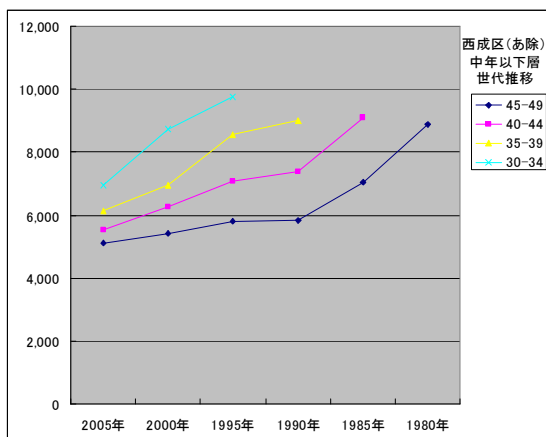
あいりん地区では、人口停滞期においても人の出入りは多いと言えらると思えますが、単純に総量だけで計算されるよりも、また、一般に考えられているよりは少ないのではなからうかと思えます。地元生まれと50年9月以前の長期居住が52%、中短期居住(50年10月～55年9月から居住)が38%、その38%の内の4割近くが地域外から増えたにすぎないのですから(55年人員22,229人の17.8%です)。

	50年	55年	増減
0-14	2,249	1,592	-657
15-19	839	665	-174
20-24	984	633	-351
25-29	1,438	808	-630
30-34	2,082	1,488	-594
35-39	2,828	2,281	-547
40-44	3,234	2,893	-341
45-49	2,809	3,420	611
50-54	2,156	3,013	857
55-59	1,539	1,963	424
60-64	1,221	1,357	136
65-69	871	1,026	155
70以上	967	1,094	127
計	23,217	22,233	-984

	増減内訳			合計移動量
	増減	差分 (当該年齢区分前区分での増減)	当該年齢区分での増減	
0-14	-657		-657	657
15-19	-174	8	-182	190
20-24	-351	-206	-145	351
25-29	-630	-176	-454	630
30-34	-594	50	-644	694
35-39	-547	199	-746	945
40-44	-341	65	-406	471
45-49	611	186	425	611
50-54	857	204	653	857
55-59	424	-193	617	810
60-64	136	-182	318	500
65-69	155	-195	350	545
70以上	127	-744	871	1,615
計	-984	-984	0	8,876
流出		-1,696	-3,234	-4,930
流入		712	3,234	3,946
差		-984	0	-984
移動量		2,408	6,468	8,876

先に、50歳以上について、世代  
人員推移のグラフを示しましたが、  
それ以下の世代についてもグラフ  
を示して見ることにします。2005

2005年	2000年	1995年	1990年	1985年	1980年
45-49	40-44	35-39	30-34	25-29	20-24
40-44	35-39	30-34	25-29	20-24	
35-39	30-34	25-29	20-24		
30-34	25-29	20-24			

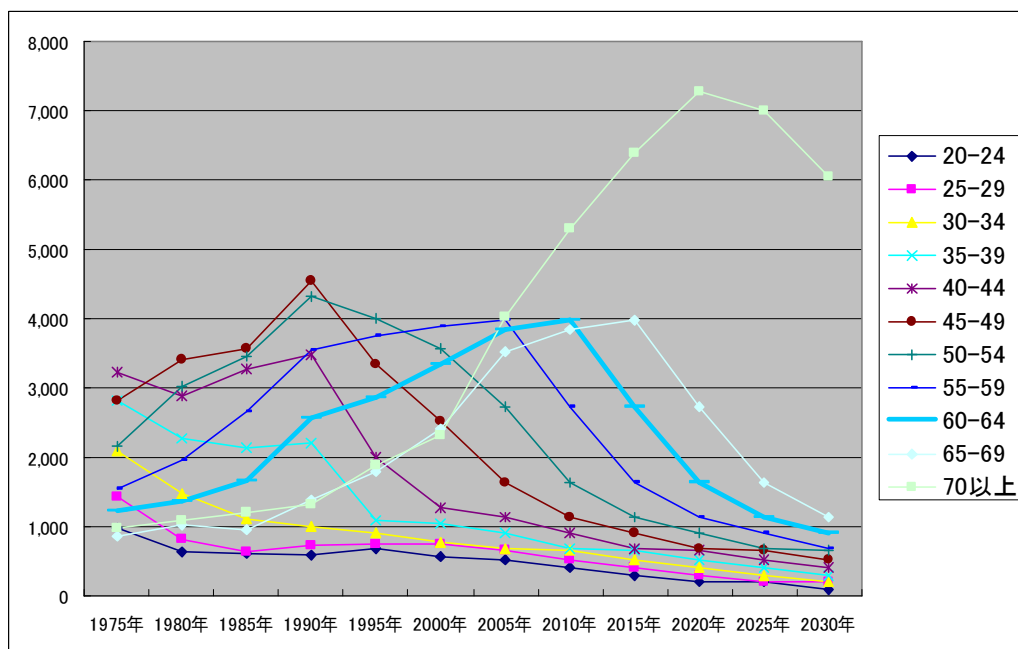


年に 45-49 歳であった人は、1980 年には  
20-24 歳でした。その年齢区分の人は、あいらん地区には 633 人しかいませんでした。  
しかし、その年齢区分の世代は、加齢と共にあいらん地区への移動が目立ちます。

あいらんを除く西成区は、20-24 歳から年齢を加えるに従って、西成区外あるいはあいらん地区へと移動していることを示しています。

### ○人口と年齢構成の将来予測一例

2005 年までは国勢調査の数字ですが、2010 年からは、移動が全くなく、加齢によつて年齢区分があがるだけという想定で、グラフを作成してみました。



あいりん	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	70以上	合計
1975年	984	1,438	2,082	2,828	3,234	2,809	2,156	1,539	1,221	871	967	20,129
1980年	633	808	1,488	2,281	2,893	3,420	3,013	1,963	1,357	1,026	1,094	19,976
1985年	624	647	1,123	2,145	3,270	3,557	3,451	2,665	1,659	955	1,201	21,297
1990年	596	729	996	2,207	3,487	4,544	4,316	3,542	2,563	1,392	1,322	25,694
1995年	687	753	913	1,090	1,998	3,342	3,991	3,749	2,863	1,805	1,876	23,067
2000年	571	756	776	1,035	1,272	2,533	3,562	3,881	3,335	2,417	2,310	22,448
2005年	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	3,842	3,527	4,025	23,659
2010年	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	3,842	5,286	22,171
2015年	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	6,390	20,095
2020年	200	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	7,265	17,515
2025年	200	200	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	6,998	14,947
2030年	100	200	200	300	400	518	656	681	914	1,137	6,045	12,562

70歳以上については、死亡率30%で減算しています。(死亡率30%は、日本福祉大学などの研究グループの研究成果による。もっとも所得の低い第一段階—生活保護受給レベル—の男性の死亡率は34.6%とある。2008年11月8日朝日新聞夕刊・大阪)

人口総数は2005年以降下がり続け、20年後には1万人近く減少します。70歳以上人口のピークは2020年と日本全体が2030年とされているより10年早く訪れます。それ以下の年齢はそれ以前に減少に転じます。

### ○学歴比較

1980年国勢調査の学歴の項を、あいりん地区とその周辺の地区で比較したものが、下記表ですが、あいりん地区男性がもっとも低学歴であることが判ります。

1980年 昭和55年 国勢調査	学歴・総数 卒業者				学歴・男 卒業者				学歴・女 卒業者			
	総数	小学校・中学校・高小・旧青年	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院	総数	小学校・中学校・高小・旧青年学校	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院	総数	小学校・中学校・高小・旧青年学校	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院
		小学校・中学校・高小・旧青年	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院		小学校・中学校・高小・旧青年学校	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院		小学校・中学校・高小・旧青年学校	高校・旧中	短大・高専・大学・大学院
萩之茶屋1丁目	100.0%	77.0%	20.6%	2.3%	100.0%	78.3%	19.6%	2.0%	100.0%	65.8%	29.0%	5.0%
萩之茶屋2丁目	100.0%	72.2%	25.3%	2.4%	100.0%	72.9%	24.8%	2.2%	100.0%	67.4%	29.0%	3.6%
萩之茶屋3丁目	100.0%	69.7%	26.6%	3.7%	100.0%	72.2%	24.8%	3.0%	100.0%	58.9%	34.2%	6.9%
太子1丁目	100.0%	69.6%	27.1%	3.0%	100.0%	70.9%	26.3%	2.8%	100.0%	62.8%	32.1%	4.5%
太子2丁目	100.0%	70.8%	23.3%	5.6%	100.0%	74.5%	19.7%	5.5%	100.0%	60.6%	33.5%	6.0%
山王1丁目	100.0%	59.7%	33.7%	6.4%	100.0%	60.0%	32.0%	8.0%	100.0%	59.5%	35.7%	4.6%
山王2丁目	100.0%	60.5%	32.5%	7.0%	100.0%	61.4%	30.8%	7.7%	100.0%	59.2%	34.5%	6.0%
花園北1丁目	100.0%	59.3%	31.8%	8.9%	100.0%	63.3%	28.2%	8.4%	100.0%	50.4%	39.6%	10.0%
天下茶屋北1丁目	100.0%	54.0%	38.3%	7.6%	100.0%	49.2%	40.2%	10.7%	100.0%	57.7%	36.9%	5.1%
あいりん	100.0%	69.2%	26.7%	4.0%	100.0%	71.6%	24.6%	3.6%	100.0%	60.6%	33.7%	5.4%
山王3丁目	100.0%	49.4%	39.8%	10.7%	100.0%	47.5%	40.0%	13.7%	100.0%	50.9%	39.7%	8.3%
花園北2丁目	100.0%	50.7%	39.7%	9.2%	100.0%	53.8%	35.7%	9.7%	100.0%	46.6%	44.8%	8.6%
花園南1丁目	100.0%	47.4%	43.0%	9.5%	100.0%	46.9%	40.2%	12.4%	100.0%	47.8%	45.6%	6.7%
花園南2丁目	100.0%	34.4%	53.4%	12.1%	100.0%	35.1%	47.8%	17.2%	100.0%	33.9%	58.3%	7.7%
天下茶屋北2丁目	100.0%	62.1%	31.0%	6.4%	100.0%	62.7%	29.3%	7.4%	100.0%	61.5%	32.9%	5.1%
天下茶屋東1丁目	100.0%	55.1%	38.5%	6.0%	100.0%	51.0%	40.6%	8.2%	100.0%	58.8%	36.7%	3.9%
天下茶屋東2丁目	100.0%	56.7%	37.8%	5.4%	100.0%	53.9%	39.4%	6.7%	100.0%	59.4%	36.1%	4.2%
天下茶屋1丁目	100.0%	57.9%	35.2%	6.9%	100.0%	61.8%	30.4%	7.7%	100.0%	52.5%	41.6%	5.9%
天下茶屋2丁目	100.0%	42.3%	46.9%	10.5%	100.0%	40.3%	45.4%	13.9%	100.0%	44.1%	48.2%	7.4%
天下茶屋3丁目	100.0%	38.5%	50.2%	11.3%	100.0%	36.1%	48.2%	15.7%	100.0%	40.5%	51.9%	7.5%
周辺	100.0%	50.6%	40.8%	8.3%	100.0%	50.9%	38.6%	10.3%	100.0%	50.3%	43.2%	6.3%

20歳以上で算出した平均年齢は、あいりん地区が47.6歳でした。あいりん地区を除く西成区は45.3歳で、2.3歳開きがあります。

1980年で47.6歳であるとする、生まれたのは1933年、現在年齢は75歳ということになります。中学卒業は32年前の1948年となります。国民学校を1946年3月まで



に卒業する者は旧制で進学し、1947年3月以降に卒業した者から全員新制中学校に進学したということですから、この世代の人は旧製の国民学校初等科（6年）か、高等科（2年）を卒業し、新制中学の3年生に進学して、中学校卒業となったと思われます。実際には、旧制のまま学歴を終えた人が多かった世代と考えられます。

1983年9月に、釜ヶ崎差別と闘う連絡会がセンター周辺で聞き取り調査をしましたが、その時の平均年齢は44.8歳、80年国勢調査よりも2.8歳若く、義務教育終了あるいは未終了者が56.1%でした。ただし、高校等の中退者を卒業歴で義務教育までとすれば、63.3%となります。

その計算でも、80年国調あいりん地区男性よりも義務教育修了者の割合が低くなっていますが、あいりん地区周辺よりは高い数字となっています。

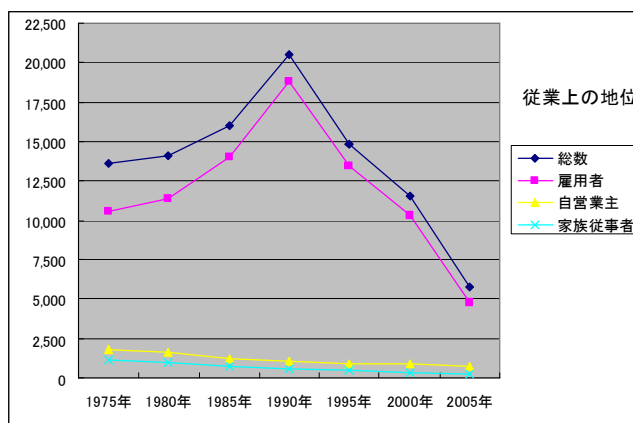
	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計	%
旧小中退			1	1			2	
新中中退		1	4				5	
小計		1	5	1			7	7.1
旧小卒			1	2			3	
新中卒	1	11	23	1			36	
小計	1	11	24	3			39	39.8
高小卒			2	7			9	
高小中退							0	
小計			2	7			9	9.2
旧中中退				2			2	
旧中卒				1		1	2	
実学中退				1	1		2	
実学卒				2			2	
新高中退			3				3	
新高卒	1	6	8	1			16	
小計	1	6	11	7	1		26	26.5
旧高専卒				1			1	
旧高卒				1			1	
大学中退		2	2				4	
大学卒			2				2	
小計		2	4	2			8	8.2
その他	1		3				4	
不明			2		2		4	
計	3	20	51	20	3	1	98	

### ○従業上の地位と産業

あいりん地区は、日本最大の日雇い労働者の街といわれています。

産業従業上の地位では、日雇い・臨時の項目が2005年集計までありませんでしたので、臨時・日雇いの割合を把握することはできませんが、人に使われて働く雇用者の割合が高く（最大時は90年の91.8%）、その多くは日雇いで働いていたと考えることができます。

産業従事者（働いている人）総数は、1990年を頂点にして、大きく減少していることが判ります。20,486人が5,741人へと、14,745人減少しています。1990年の20歳以上65歳未満は22,980人、2005年のそれは16,107



	総数	雇用者	自営業主	家族従事者
1975年	13,562	10,574	1,838	1,140
1980年	14,070	11,410	1,652	1,003
1985年	16,026	14,046	1,261	718
1990年	20,486	18,802	1,094	590
1995年	14,852	13,442	919	491
2000年	11,532	10,286	926	322
2005年	5,741	4,753	769	216
1975年	100.0%	78.0%	13.6%	8.4%
1980年	100.0%	81.1%	11.7%	7.1%
1985年	100.0%	87.6%	7.9%	4.5%
1990年	100.0%	91.8%	5.3%	2.9%
1995年	100.0%	90.5%	6.2%	3.3%
2000年	100.0%	89.2%	8.0%	2.8%
2005年	100.0%	82.8%	13.4%	3.8%

人で、減少は 6,873 人。産業従事者の減少幅は稼働年齢層の減少幅よりはるかに大きいといえます

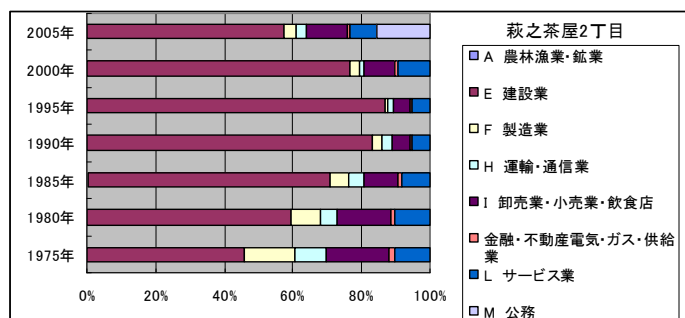
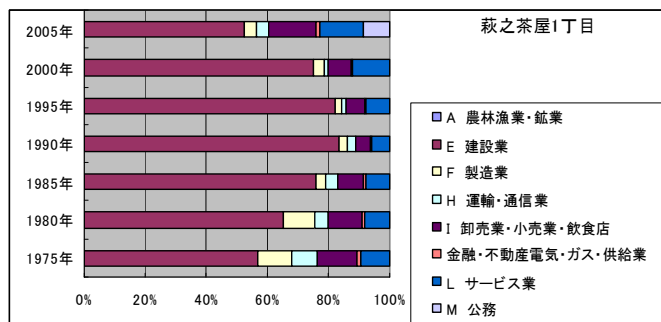
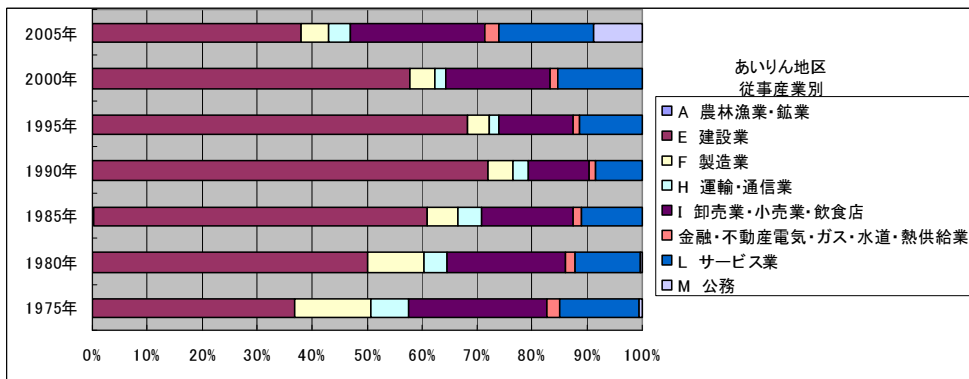
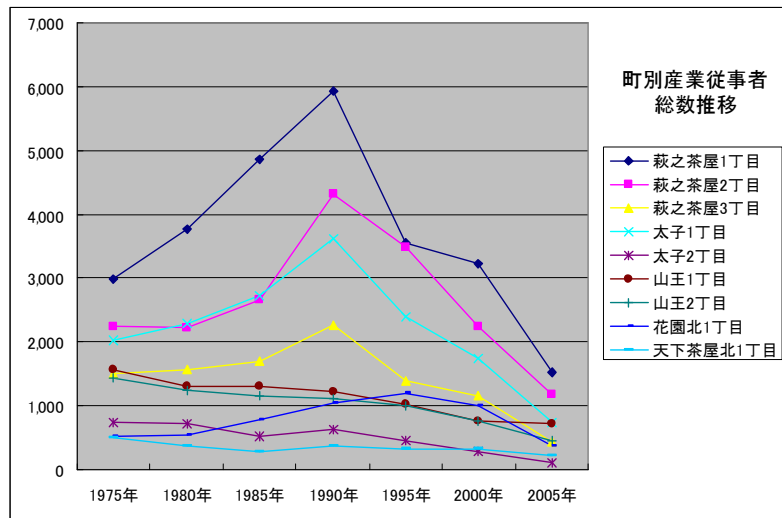
あいりん地区の日雇労働者の多くは、建設・土木産業で働いているといわれています。1975 年では 36.7%、

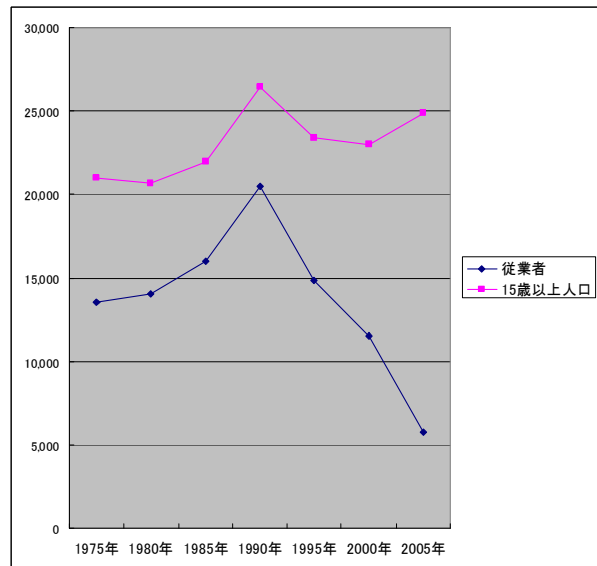
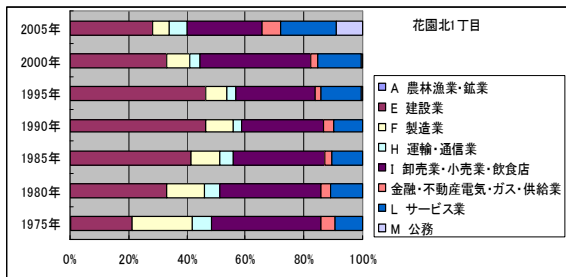
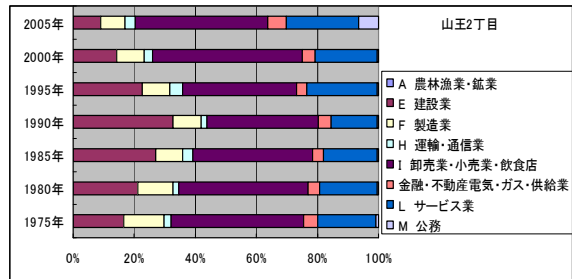
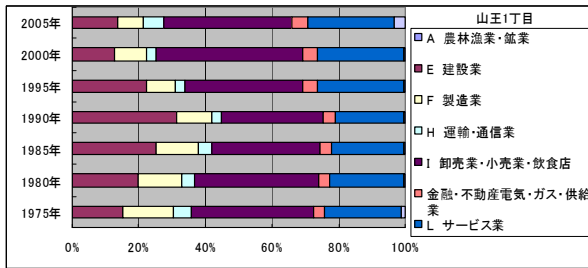
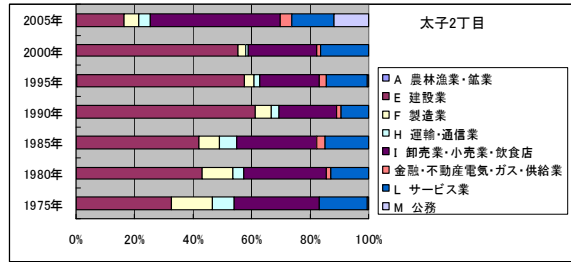
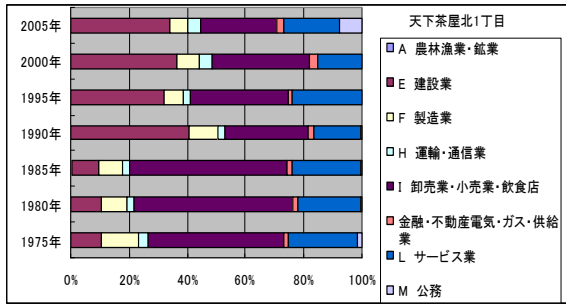
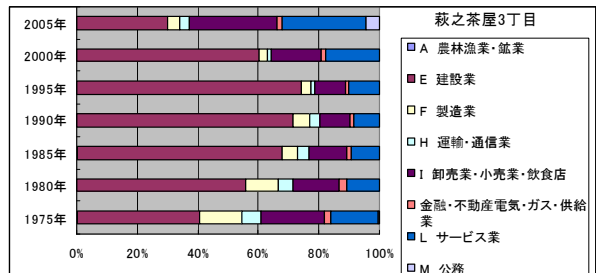
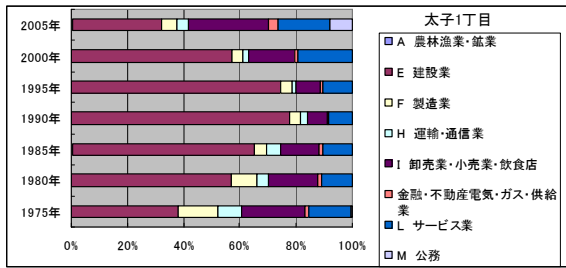
1990 年 71.6%、2005 年 37.8%、建設産業に従事する人の地域への

集中度は高いといえるでしょう。しかし、近年、占める割合は下がっているといえます。

2005 年公務には、便宜上、「その他の産業に分類されないもの」を足しています。

あいりん地区全体では、建設業に従事する人の割合に増減がありましたが、地区内各町でも、変動があります。しかし、町により特徴があり、地区全体の傾向とは違う傾向を示している町もあります。





たとえば、花園北1丁目や天下茶屋北1丁目、萩之茶屋2丁目などは、1990年を最高とすることは変わらないものの、1975年の割合より多くなっています。

製造運輸の割合は1975年最大に減少を続けていますが、山王2丁目は一定割合を維持しているといえます。

建設業の割合の低下を埋めるものとして割合を増やしているのは、卸・小売・飲食店ですが、全体の従事者総数が大きく減少していることは確認済みですから、これを持って街の様相が労働者の街から飲食小売の街に変わったといえないことは言うまでもあ

りません。

15歳以上の地区人口と産業従事者総数の推移をグラフ（前頁下）で見ると、違和感を覚えます。

1975年から1980年にかけては、15歳以上の若干の減少、働いている人の若干の増加です。

これは、人員が減っても、それまで働いていなかった人が働き始めたと考えることができ、違和感はありません。

1990年までは、15歳以上地区人口も働いている人も増えているのですから、働く人の地区への新規移動と理解できます。

1990年から1995年にかけては、従事者の減少より地区人口の減少割合が少ないのが気になります。しかし、これは多分、あいりん地区外でも経済の不況期には見られる現象だと考えることができます。

そう考えても理解しにくいのが、1995年以降の従事者の減少と15歳人口の停滞・増加という推移です。

### ○労働による収入以外の収入による生活者の増加

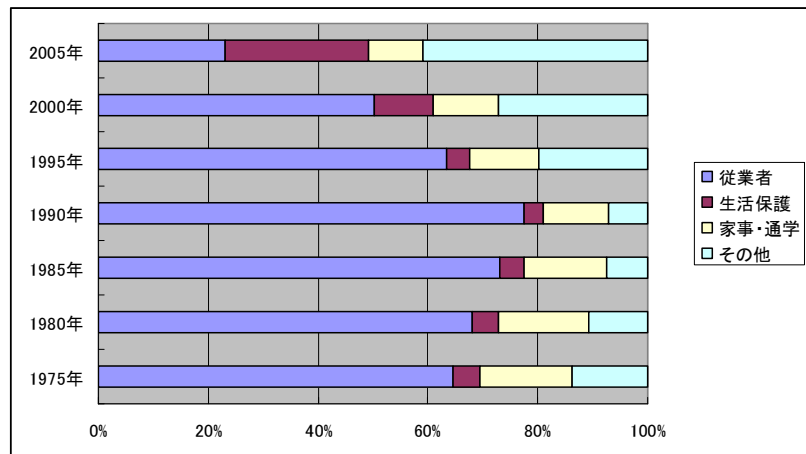
人が生活するには、働いて収入を得なければなりません。勿論、働く以外にも社会保障制度＝生活保護を活用することで生活に必要な最低限度の収入を得ることができます。

右表は、従事者（国勢調査数字）に、生活保護受給者の推定値と家事・通学している人（1980～90年は国勢調査。他は推定値）を加えたものです。

生活保護受給者の推定値は、西成区福祉事務所発行

	15歳以上人口	従業者	生活保護	家事・通学	その他
1975年	20,968	13,562	1,021	3,500	2,885
1980年	20,641	14,070	940	3,443	2,188
1985年	21,947	16,026	961	3,317	1,643
1990年	26,413	20,486	900	3,127	1,900
1995年	23,409	14,852	1,000	2,900	4,657
2000年	22,982	11,532	2,500	2,700	6,250
2005年	24,900	5,741	6,500	2,500	10,159
1975年	100.0%	64.7%	4.9%	16.7%	13.8%
1980年	100.0%	68.2%	4.6%	16.7%	10.6%
1985年	100.0%	73.0%	4.4%	15.1%	7.5%
1990年	100.0%	77.6%	3.4%	11.8%	7.2%
1995年	100.0%	63.4%	4.3%	12.4%	19.9%
2000年	100.0%	50.2%	10.9%	11.7%	27.2%
2005年	100.0%	23.1%	26.1%	10.0%	40.8%

「昭和61年度生活保護運営方針並びに年間事業計画」に記載されている「地区別非保護世帯の推移」の内あいりん地区小計（1977年1,021人、1980年940人、1985年961人）と西成区支援運営課数字



(2002年 2,500人、2004年 5,669人、2008年 6,931人)を参考にしています。

2005年には、2000年より従事者が5,791人減少していますが、生活保護は推定で4,000人増えており、仕事を失った人が他地区へ移動したのではなく、生活保護受給者として同地区に留まっていることを示すものと考えられます。

増加したのが「その他」の人々であることは明らかです。年齢での検討で明らかだったのは、近年の人口増が65歳以上を中心とするものでした。

2005年、世帯分類では一般世帯が14,061人、その他世帯が11,180人でした。

2005年で、活保護と家事・通学の合計は推定9,000人。15歳未満人口は、341人でした。その合計(9,341人)と一般世帯人員との差、4,720人は、一般世帯に所属する従事者であると考えられます。

従事者(5,741人)の中で、その他世帯に所属するのは、5,741人-4,720人=1,021人と計算されます。その他世帯11,180人から1,021人を引くと、10,159人。この数字は、15歳以上人口から従事・生活保護等を引いた「その他」の人数と合っています。

このことから、「その他」の人々は、世帯分類ではその他世帯に含まれていると考えることができます。

では、その他世帯に属する10,159人はどのような人なのでしょう。

あいりん地区の中には、生活保護施設が2箇所あります。大阪自彊館愛隣寮(定員100名)、大阪自彊館三徳寮(定員150名)です。

法外援護の生活ケアセンター(定員224名)とあいりん臨時緊急夜間避難所(定員1,040人=実人員800で計算)もあります。

地区内の三公園やセンター周辺、山王商店街・高速高架下などで野宿をする人々もいます。それらの合計を2,500人とする、7,659人が簡易宿泊所で生活していると推定せざるをえません。

簡易宿泊所で生活している7,659人について、推測できる資料があります。

少し古いのですが、簡宿組合加入の簡宿に泊まっている65歳以上を対象とした、簡宿高齢者調査の結果です。

1976年で、3分の一が年金受給者であることが示されています。

1976(昭和51)年9月15日現在

		男	女	計		
年金受給状況	国民年金	48	7	55	21.8%	
	内訳	老齢年金	47	6	53	
		障害年金	1	1	2	
	厚生年金	8	0	8	3.2%	
	その他(不明)	13	2	15	6.0%	
	回答無し				0.0%	
	計	69	9	78	31.0%	
調査数	221	31	252	100.0%		

1983(昭和58)年8月26日現在

		65~69歳	70~74歳	75歳以上	計		
年金加入状況	無し	54	22	8	84	33.7%	
	有り	国民年金	6	12	8	26	10.4%
		厚生年金	6	7	3	16	6.4%
		その他	5	11	7	23	9.2%
		不明	1	5	5	11	4.4%
	回答無し	45	33	11	89	35.7%	
	計	117	90	42	249	100.0%	

1985(昭和60)年10月1日現在

		65~69歳	70~74歳	75歳以上	計		
年金加入状況	無し	49	27	6	82	32.5%	
	有り	国民年金	8	6	16	30	11.9%
		厚生年金	5	8	7	20	7.9%
		その他	4	5	1	10	4.0%
		不明				0	0.0%
	回答無し	62	36	12	110	43.7%	
	計	128	82	42	252	100.0%	

1983年と1985年では、受給状況と聞くのが露骨であると考えられたためか、加入状況となっています。

1985年の加入状況は、若干落ち込んでいますが、それでも23.8%あり、多分一般的な予想を上回る数字となっています。

再度確認すると、年齢での検討で明らかだったのは、近年の人口増が65歳以上を中心とするものでした。簡宿高齢者調査と合わせて考えれば、年金受給者を中心としての増加であったと考えられないこともありません。

仮定	15歳以上人口	従業者	生活保護	年金仕送り	家事・通学	施設等	野宿
2005年	24,900	5,741	6,500	7,659	2,500	1,700	800
	100.0%	23.1%	26.1%	30.8%	10.0%	6.8%	3.2%

2005年国勢調査は簡易調査で、収入についての項目はありませんでした。2000年は大規模調査で、「家計収入の種類」がありました。2010年は大規模調査の年なので、収入について把握できる可能性があります。

従って、現在は過程を検証する方法を考えつきません。仮定はどの程度正しいのか不明のままです。

2005年のあいりん人口の内、65歳以上は7,552人、上記表「仮定」の「年金・仕送り」に近い数字ですが、「生活保護」の相当部分が65歳以上（約7割-2008年）と考えられますから、65歳以上7,552人の内5,300人は生活保護と考えられます。

そうすると7,659人の内5,300人は65歳以下と考えられ、年金の可能性のあるのは約2,300人となります。

2005年で65歳以上は、1940（昭和15）年生まれです。

2005年あいりん人口で、60-64歳は3,842人でしたが、これらの人々は1945（昭和20）年以前の生まれになります。年金受給と全く関係のない年齢とは言い切れません。7,659人の内、60歳未満は多くて3,000~3,800人と計算されます。

この人たちが、簡宿住まいで、収入源

(男) 60歳前半の老齢厚生年金 支給開始年齢 見易表							(男) 60歳前半の老齢厚生年金 支給開始年齢 見易表						
生年月日	60歳	61歳	62歳	63歳	64歳	65歳	生年月日	60歳	61歳	62歳	63歳	64歳	65歳
大正15年4月2日	報額						大正15年4月2日	報額					
昭和16年4月1日	定額						昭和16年4月1日	定額					
	加給							加給					
昭和16年4月2日	報額						昭和16年4月2日	報額					
昭和18年4月1日	定額						昭和18年4月1日	定額					
	加給							加給					
昭和18年4月2日	報額						昭和18年4月2日	報額					
昭和20年4月1日	定額						昭和20年4月1日	定額					
	加給							加給					
昭和20年4月2日	報額						昭和20年4月2日	報額					
昭和22年4月1日	定額						昭和22年4月1日	定額					
	加給							加給					
昭和22年4月2日	報額						昭和22年4月2日	報額					
昭和24年4月1日	定額						昭和24年4月1日	定額					
	加給							加給					

を推定できない層として残ります。

もう少し推定を重ねてみます。

65歳以上の人は、生活保護の他、野宿・施設・一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で入れると、簡宿住まいの65歳以上の推定値は、

65歳以上 7,552	生活保護	5,300
	生保外	1,000
	簡宿	1,252
60-64歳 3,842	生活保護	800
	生保外	900
	簡宿	2,142

1,252 人となります。

60-64 歳人口も同じように、生活保護の他、野宿・施設・一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で入れると、簡宿住まいの 60-64 歳の推定値は、2,142 人となります。

先の「仮定」表の内「年金・仕送り」の項の人員 7,659 人から 60 歳以上人員を引くと、4,265 人が残ります。

仮定の 簡宿・無業 7,659	65歳以上	1,252	年金受給 可能層
	60-64歳	2,142	
	60歳未満	4,265	

これらの人々は、国勢調査上、産業に従事しておらず、年金受給している可能性のない人々と考えられます（もと船員・炭坑労働者は 55 歳から年金受給できますが）。

簡宿住まいで、時々センターから就労するものの、建設産業で働いているという「日雇い専門意識」を持たない層が、該当項目を未記入で提出した結果と考えられないでもありません。

「あいりんには、これまでもそんな人がたくさん居た」としても、国勢調査のここ 2 回の結果で、目立つようになったのは確かで、これまででない傾向です。

なんらかの説明が求められていると考えますが、今のところ説明に使える情報を持ち合わせていません。

#### 簡宿写真・図利用元紹介

\*67 頁図写真: 泰平の谷間の生と死 小杉邦夫 1978 年 9 月 プレイガイドジャーナル社

\*68 頁: あいりん地区簡易宿所調査 1969 年 3 月 関西都市社会学研究会



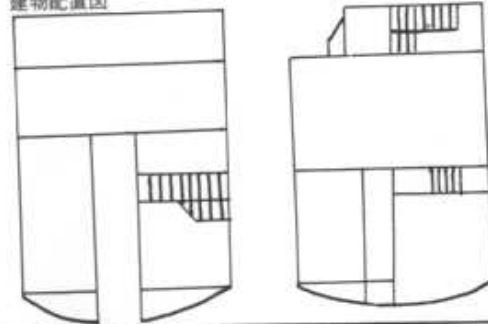
〈建物概要〉敷地 西成市民館内

昭和 47 年 3 月発行の「大阪に社会福祉施設」所収の「わかくさ保育園」昭和 45 年開設。

1979 年までには建て変わっていた？



建物配置図



昭和 47 年 3 月発行の「大阪に社会福祉施設」所収の西成市民館の写真  
鉄筋コンクリート造り二階建てとある。現在への建て替え時期は？